

第2章 館林市の現況・特徴

1 地理的環境

(1) 位置

館林市は、「上毛かるた」に「鶴舞う形」と詠われる鶴の頭の部分、群馬県の東南部にあたり、関東地方のほぼ中央に位置する。東は邑楽郡板倉町、南は同明和町、南西は同千代田町、西は同邑楽町と隣接し、北は栃木県(足利市、佐野市)との県境になっている。

北に渡良瀬川、南に谷田川、さらに隣接する邑楽郡明和町を隔てた南に利根川と、南北に大きな河川が流れ、城沼・多々良沼・茂林寺沼や近藤沼といった多くの池沼(里沼)が点在し、豊かな水資源と自然環境に恵まれている。

東京都(台東区浅草)から直線距離で約70kmに位置し、県内でも特に東京都に近い。東北自動車道や東武鉄道を利用すれば約1時間という良好なアクセスを活かし、都心への通勤・通学圏となっている。また、都内からは日帰りで楽しめる観光地としても多くの人々が訪れる。

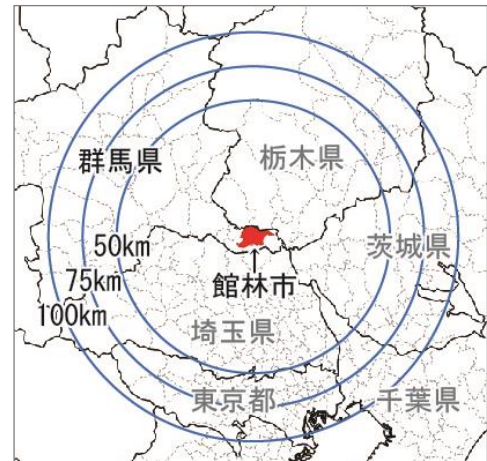


図 2-1 館林市の位置



図 2-2 館林市内の交通網

(2)交通

館林市内には東武鉄道伊勢崎線(茂林寺前駅・館林駅・多々良駅)、同佐野線(渡瀬)、同小泉線(成島駅)といった鉄道路線が通り、市中心部の館林駅で結節している。浅草から、東武伊勢崎線により約1時間で移動が可能である。また、この3路線のほかに、市内のみを循環する路線がある。しかし、バスなど公共交通機関の利用よりも、自家用車への依存度が高い。主要な幹線道路は、市内を南北に通って埼玉・東京方面につながる一般国道122号、市内を東西に通り茨城方面へとつながる一般国道354号バイパス(東毛広域幹線道路)のほか、主要地方道6路線、一般県道13路線がある。また、東北自動車道が市の東部を南北に縦断し、館林インターチェンジ(IC)を介した広域アクセスにも恵まれている。市内のバス交通は、本市と邑楽郡内3町を結ぶ広域3路線があり、館林駅を中心に放射状の路線網を形成している。運行は民間業者2社が受託している。

(3)土地利用

平成28年(2016)時点で市域面積6,097haの全体が都市計画区域となっており、そのうちの1,691ha(28.0%)が市街化区域である。市街地は城下町から発展した旧館林町から周辺に広がっている。人口集中区域は郊外へ拡大していく一方、人口集中地区における人口密度は、昭和45年(1970)の68.6人/haから平成27年度(2015)には41.3人/haまで減少し、令和2年度(2020)にはさらに36.7人/haまで落ち込み、まちなかの空洞化が一層深刻な状況である。一方、市街化調整区域の大半は、農地や水面(河川や沼)などの自然的土地利用で、豊かな水資源や肥沃な土壌を活かした農業の盛んな地域である。市街化区域・市街化調整区域を区分する以前の既存集落や住宅地が点在している。市域全体の利用区分は、宅地が28.0%・農地44.9%・池沼1.4%・山林3.1%・その他22.6%である。

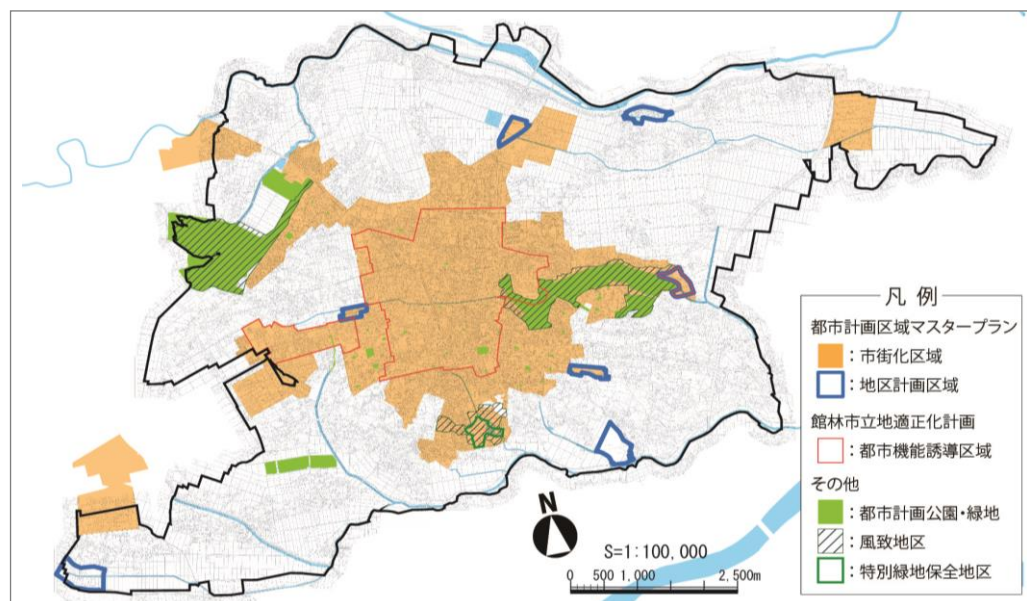


図 2-3 館林市域の土地利用

(4)地域区分

館林市内は八つの地区に区分されている。その区分は、昭和29年(1954)の合併によって市制施行される以前の、明治22年(1889)に誕生した1町7か村(館林町・郷谷村・大島村・赤羽村・六郷村・三野谷村・多々良村・渡瀬村)に基づく。



図 2-4 館林市の地域区分

出典：「都市計画図(平成29年9月)」 「館林市立地適正化計画」より作成

2 自然環境

(1)地形・地質

館林市は関東地方のほぼ中央に位置し、形成された時代が異なる二つの平野地形「洪積台地」と「沖積低地及び谷底平野」で構成される。市東部地域は海拔約15m、市内最高地点でも約33mで、山地や丘陵はない。

洪積台地は高台状になっており、その標高は20m前後、日本列島で火山活動が盛んであった更新世の噴出物が堆積して形成された。その地層は一般に「赤土」あるいは「関東ローム層」とも称される。市域周辺の高台は「邑楽台地」と呼ばれ、市街地や多くの集落が立地している。また、5万年前に大泉町古海から館林市高根町に至る河道の、主に右岸に大量の砂を運搬・堆積させて利根川が形成した自然堤防の砂層である内陸古砂丘がある。

沖積低地及び谷底平野は火山活動が穏やかになった後、完新世に風や河川などによって運ばれた、いわゆる「黒土」によって形成される。渡良瀬川に面した市域北部や、谷田川に面した市域南部には水田が広がる。その標高はおおむね20m以下で、市域の低地部分にあたる。谷底平野部分には城沼・多々良沼・茂林寺沼・近藤沼などの池沼があり、独特の水郷景観を今に伝えている。

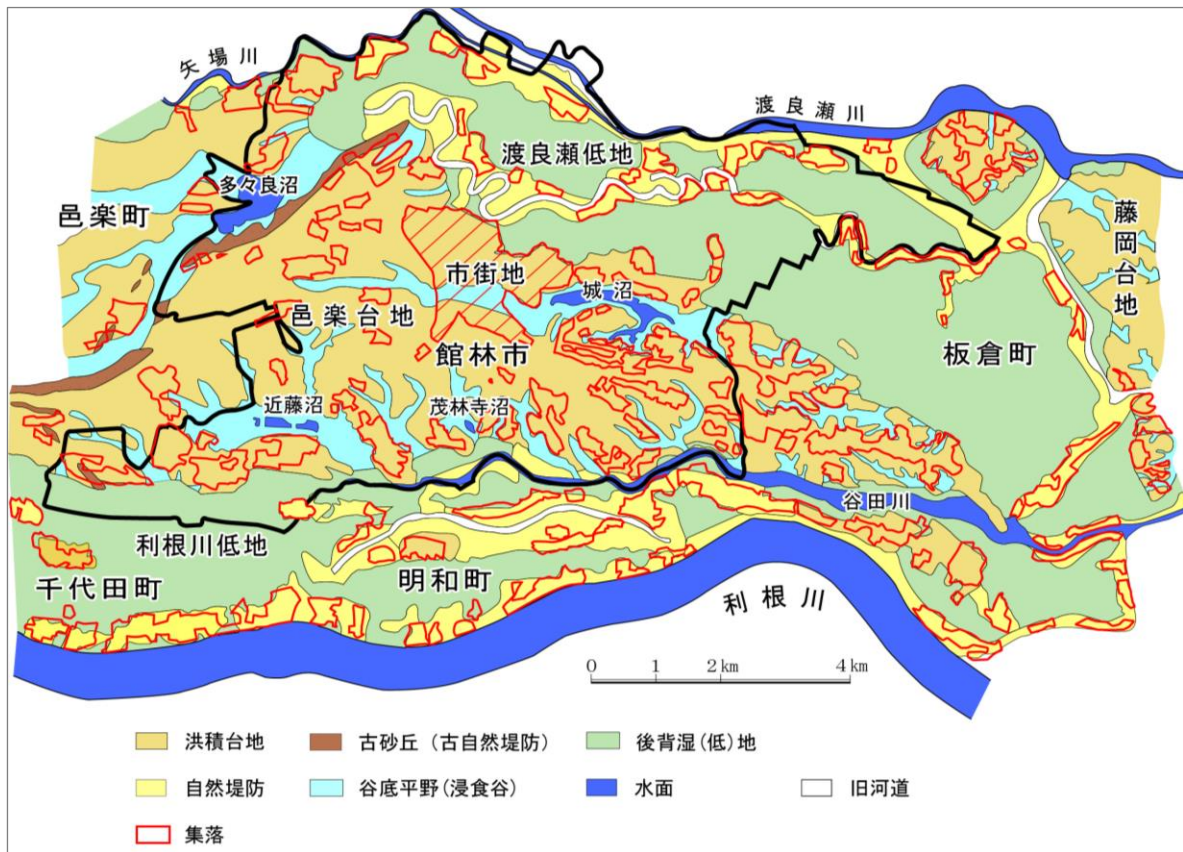


図 2-5 地形図『館林市史 特別編第 6 巻』より



写 2-1 多々良沼東岸の内陸古砂丘

(2)気象

館林市が位置する群馬県平野部の気象の特徴として、日照時間が長いこと、季節による寒暖差が大きいこと、台風の直撃が少ないことが挙げられる。また、夏には雷が頻発することや、冬は降雪が少なく、いわゆる「からっ風」と呼ばれる北西からの強風が吹くことも、気象的な特徴といえ、本市の歴史文化を形成する要因ともなった。現在でも、屋敷の西に「からっ風」に備えた防風林が確認できる。

近年は、夏季の気温が全国でも上位を記録することが多い。

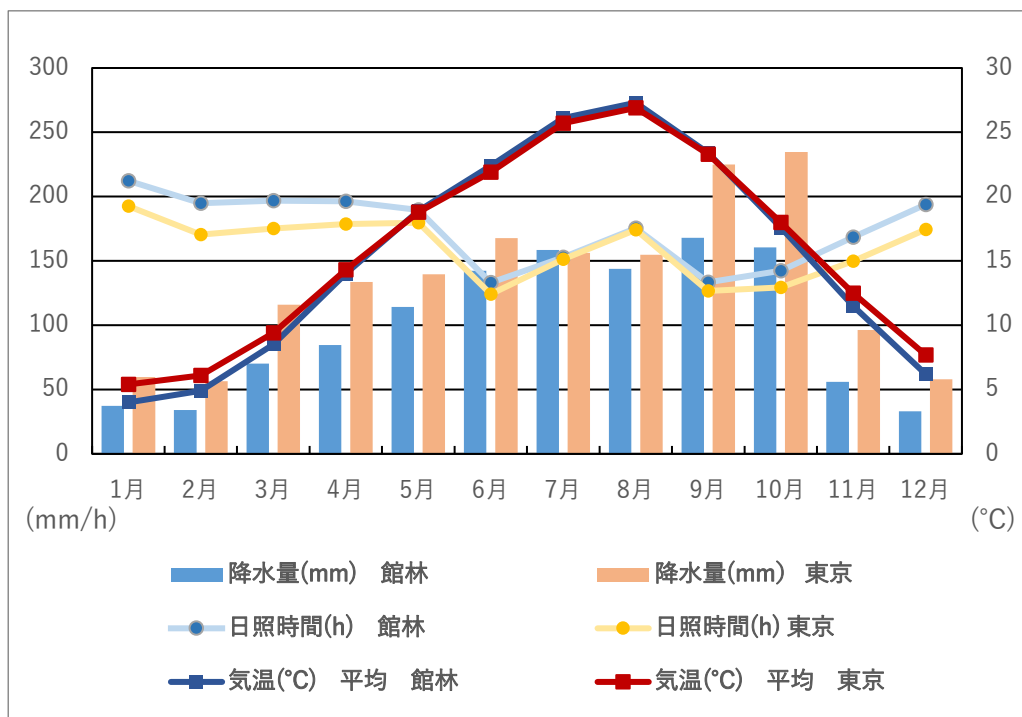


図 2-6 令和 3 年(2021)館林と東京の月別降水量・平均気温・日照時間
気象庁・過去の気象データ(<http://www.data.jma.go.jp/gmd/risk/obsdl/index.php>)をもとに作成



写 2-2 “からっ風”に備えた屋敷林(北成島町)

(3) 植生・植物

館林市は暖温帯広葉樹林帯に位置するが、冬の強い季節風や乾燥、降霜などの気象条件のため、ツバキ・カシ・シイ類の照葉樹林の残存林は見られない。寺院の境内や鎮守の森は、ヤブツバキ・シラカシ・ヒサカキ・シロダモなどの暖温帯性樹種で構成されている。台地にわずかに残る平地林は、すべて人の手が入った二次林である。

湿地環境は減少傾向にあるが、城沼・多々良沼・茂林寺沼・近藤沼などの池沼や湿原が現在まで残されている。中でも茂林寺沼周辺は「茂林寺沼及び低地湿原」として群馬県の指定天然記念物となっており、低地湿原の様態を比較的良く保ち、湿地特有の希少な植物を多く目することができる。

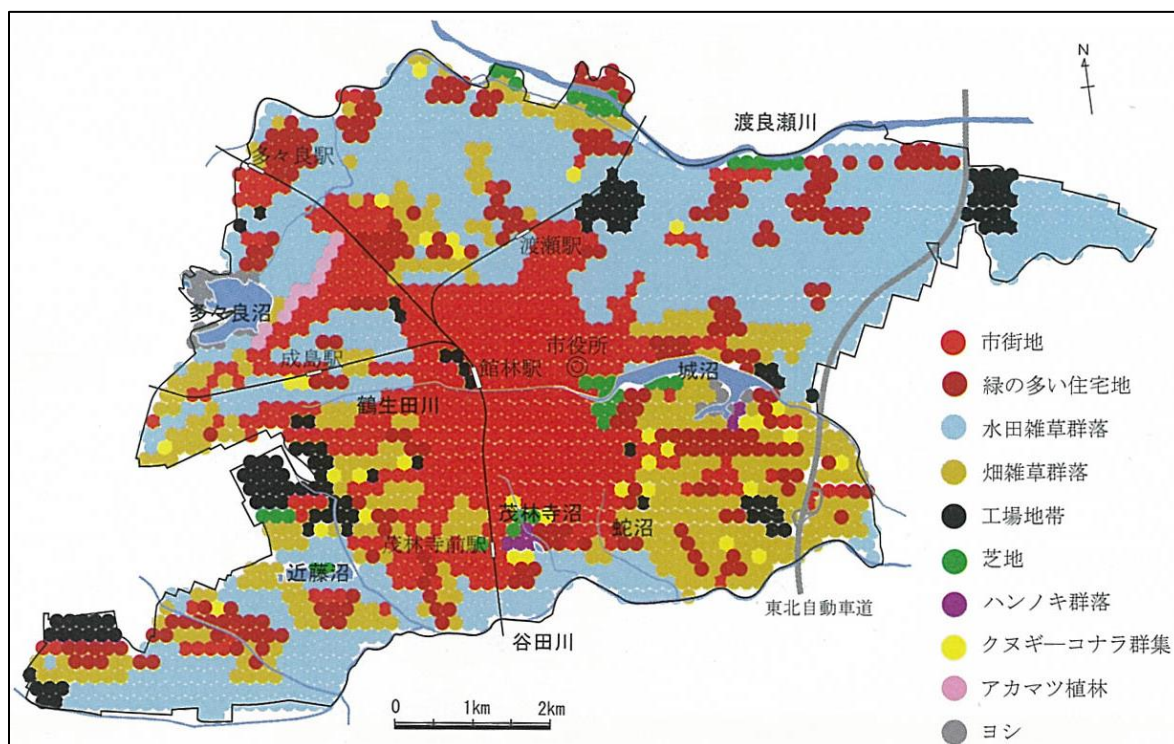


図 2-7 植生分布図『館林市史 特別編第 3 巻』より



写 2-3 県指定天然記念物
「茂林寺沼及び低地湿原」



写 2-4 社寺林(高根町大山祇神社)

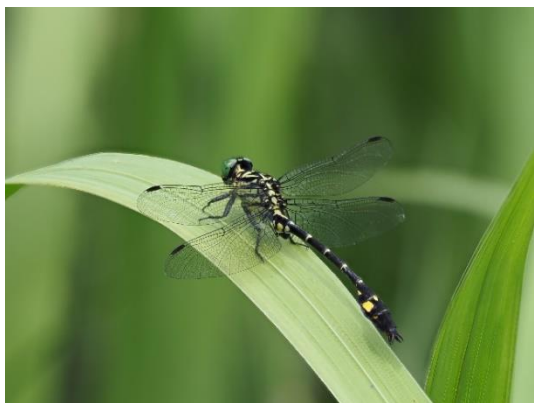
(4)動物

館林市は池沼と大小の河川、低地湿原の存在により、多様な昆虫・水鳥・魚類などが生息する。特に湿地性昆虫の代表と言われるトンボは、市域で9科52種が確認されているが、茂林寺沼周辺だけでも9科42種が記録されており、多くの種類が生息する地域として知られている。

蝶ではギンイチモンジセセリ・ジャコウアゲハ・ゴマダラチョウなど、蛾ではギンモンアカヨトウなど、県内でも貴重な種が残っており、池沼や河川、低地湿原における自然環境の豊かさが示されている。

また、市域に特徴的な水鳥として、ハクチョウがある。館林市は県内唯一のハクチョウの飛来地として知られ、昭和50年代から越冬のため飛来するようになった。コハクチョウ・オオハクチョウが毎年数百羽訪れ、多々良沼と城沼を行き来している。

魚類はコイ科を中心に生息し、県下で唯一、ボラやスズキなどの汽水魚が生息することが特徴である。近年は外来種の流入による生態系の変化も起きている。



写 2-5 トンボ(ナゴヤサナエ、茂林寺沼湿原)



写 2-6 蝶(ミドリシジミ、茂林寺沼湿原)

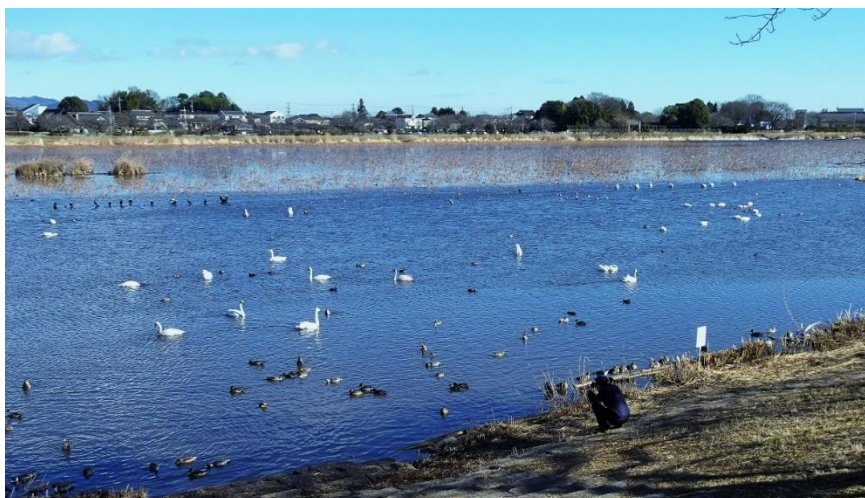


写真 2-7 飛来したハクチョウの群れ(城沼)

(5)景観

館林市は、平野のまちで山地や丘陵は全く存在しない。日光連山などの遠くの山々を一望することができる。また、城沼・多々良沼・茂林寺沼・近藤沼などの池沼では、特徴的な水郷的景観が形成されている。

城沼は、南岸に国指定名勝「躑躅ヶ岡(ツツジ)」が存在し、江戸時代より大名庭園として保護されてきた。対岸の善長寺側から望む城沼に反射した満開の躑躅ヶ岡の趣は、戦前の絵はがきにも使われた、沼を借景とした独特の見事な風景である。また、弘化2年(1845)に描かれた市指定重文「上毛館林城沼所産水草図」には12種の水草が描かれているが、そうした水草のある風景は現代にも継承されている。

多々良沼は、北岸にかかる富士見橋の名が示す通り、沼越しに富士山を望むことができる。多々良沼へ飛来したハクチョウとともに富士山を望む風景は、冬の多々良沼の風物詩となっている。

茂林寺沼は、県指定天然記念物「茂林寺沼及び低地湿原」として低地湿原特有の自然環境をもち、茂林寺と隣接することもある静謐さを保っており、住宅地の中にあるにも関わらず地域の原風景的な自然美を体感できる。

近藤沼は、かつてホリアゲタ(掘上田)と呼ばれる耕作形態があり、沼底の土を浚って沼上にクリーク状に水田を設け、独特の景観を形成していた。昭和後期の開発でその大部分は失われたが、沼の西部に一部かつての名残を見ることができる。



写 2-8 城沼を借景とした躑躅ヶ岡



写 2-9 多々良沼から望む富士山とハクチョウ



写 2-10 原風景を残す茂林寺沼湿原



写 2-11 失われた近藤沼のホリアゲ

3 社会環境

(1) 人口

館林市の人口は 1 町 7 か村が合併した市制施行後の昭和 3 0 年(1955)に 56,047 人であり、平成 1 7 年(2005)まで増加を続け、79,454 人のピークを迎えた。

その後は減少傾向にあり、平成 2 7 年(2015)には 76,667 人となり、令和 6 年 8 月現在は 73,779 人で、令和 2 2 年(2040)には、59,877 人になることが予想されている。

年少人口(1 4 歳以下)が減少する一方で、老年人口(6 5 歳以上)は増加しており、少子高齢化の進行が見込まれている。

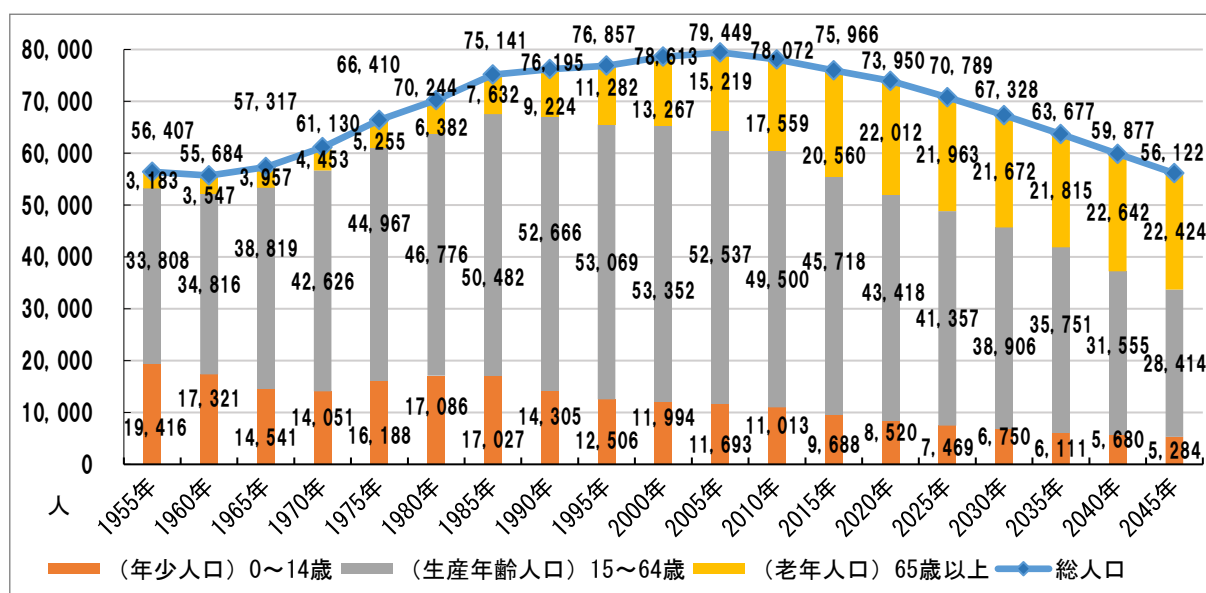


図 2-8 館林市の総人口の推移

1955～2010 年のデータは『館林市統計書(令和 4 年版)』から、2015～2045 年のデータは「日本の将来推計人口(令和 5 年推計)」国立社会保障・人口問題研究所

(https://www.ipss.go.jp/pp-zenkoku/j/zenkoku2023/pp_zenkoku2023.asp) をもとに作成

(2) 産業

市内総生産額は 2,784 億円(『平成 2 9 年度市町村民経済計算』)で、県内 3 5 市町村中で 8 位、県内総生産の 3.10%を占める。産業別生産額を見ると第三次産業の割合が高く、その割合は平成 1 2 年度以降、微増減を繰り返している。

産業分類	事業所		従業者		総生産額	
	事業所数	構成比	従業者数	構成比	総生産	構成比
第一次産業(農林漁業)	22	0.63%	197	0.59%	3,859	1.4%
第二次産業(鉱・建設・製造業)	724	20.62%	9,597	28.91%	103,088	37.2%
第三次産業(その他)	2,766	78.76%	23,398	70.49%	169,853	61.4%

表 2-1 館林市の産業の内訳

事業所・従業者は『平成 2 9 年度経済センサス基礎調査』、総生産額は『平成 2 9 年度市町村民経済計算』をもとに作成

①産業の構成

館林市の産業を区分別の割合でみると、事業所数・従業者数・総生産額のいずれも小売業・サービス業など第三次産業の割合が最も多く、次いで製造業など第二次産業、最も割合が少ないのは第一次産業である。

「産業の特化係数※」からは、製造業・農業・林業・運輸業・郵便業・複合サービス業が地域で卓越(特化)した業種と考えられる。その中でも製造業の特化係数は高く、特に麦を使った食料品製造業がその中心となっている。次いで、鉄道・道路網の利便性や東京都の近接性に起因すると思われる、運輸業(郵便業を含む)の特化係数が高くなっている。

※産業の特化係数：

地域の特定の産業が、どれだけ特化しているかを示す係数。一般的にこの値が1を超えると、その産業は地域で卓越した業種と考えられている。係数は以下の計算式を用いて算出される。[館林市の各産業の就業者数比率/全国の各産業の就業者数比率]

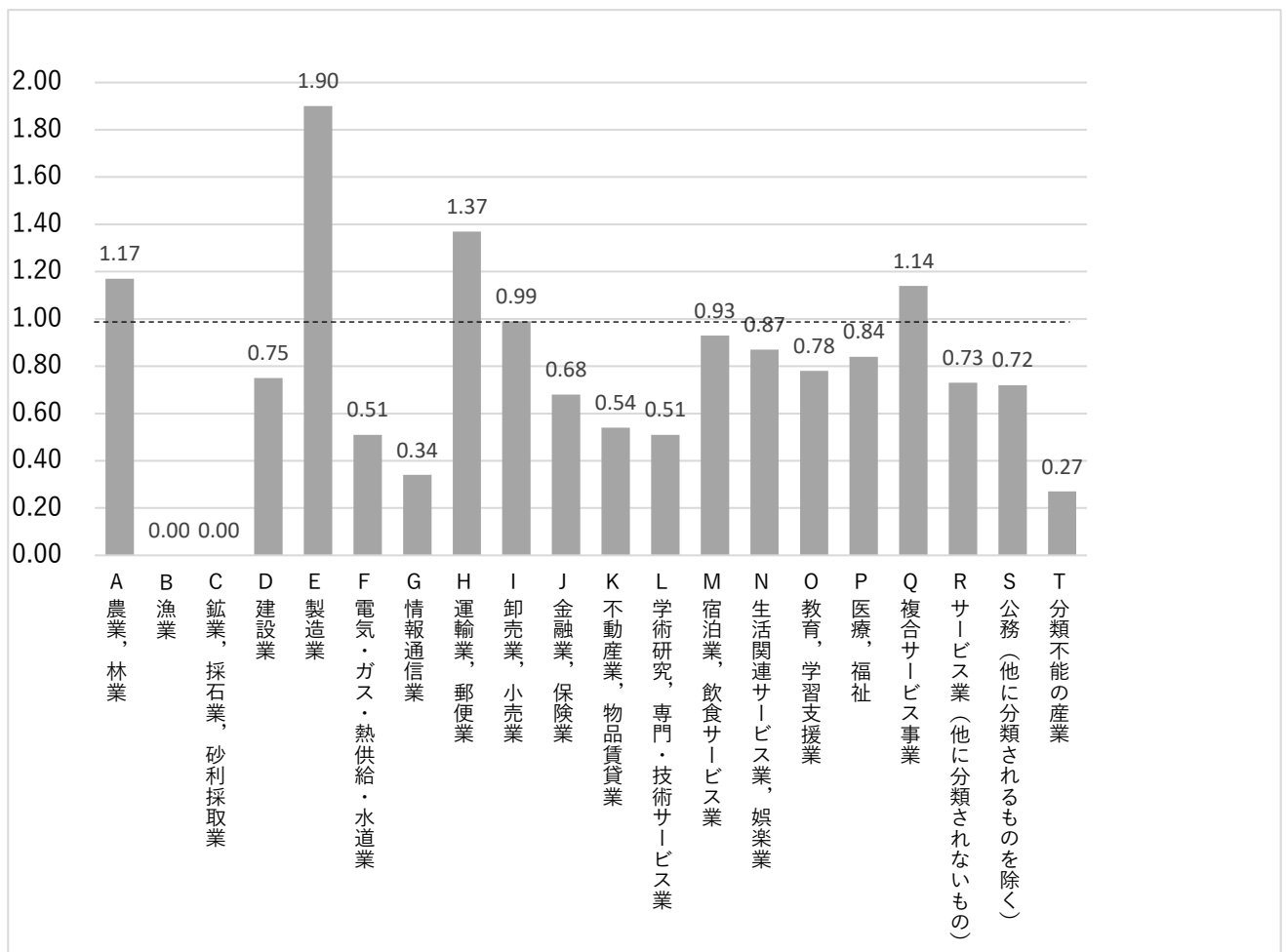


図 2-9 館林市の産業特化係数 令和2年(2020)国勢調査をもとに作成

②農業・水産業の変遷

館林市は、1970 年代のいわゆる「高度成長期」に至るまで現在の中心市街地(館林城とその城下町)を除けばほとんどが農村地域で、多くの市民が農業を生業としてきた。また、低湿地や沼地とともに台地が多い地形的な特徴から、かつての市内では水田より畑地が多く見られた。

畑地では、日照時間が長く冬季に「からっ風」※が吹いて乾燥する気候のため、冬場の麦作(大麦・小麦)が盛んに行われた。このほか、大豆や陸稲などの穀物や、カボチャやナス、キュウリなど野菜類の栽培も盛んであった。また、冬に雨が少なく乾燥する気候は麦を加工した“うどん”の製造に都合が良く、今日まで続く館林市の特産品が生まれる背景となった。

稲作の収量は、ポンプで畑に水を引く「陸田^{りくでん}」の増加などによって戦後に飛躍的に増加した。冬の麦栽培(大麦・小麦・ビール麦)と組み合わせた「二毛作」も盛んになった。

また、かつては近隣の沼や川で獲れる川魚が貴重なたんぱく源であったことから、農家の副業として盛んに漁業が行われた。しかし、戦後の生活様式の変化や、水質汚染による水生動物の減少などにより、今はその姿を見ることは出来なくなった。現在ではレジャーとしての釣りや、市民に親しまれる多様な川魚料理として、その文化が受け継がれている。

※からっ風：

冬季に吹く北西風で、強風であることが多い。館林地域を含む関東平野では、強風の吹く方向にある赤城山にちなんで「赤城おろし」と呼ばれる。市内の農家住宅では、敷地の北西側を囲むかたちで防風を目的とした屋敷林が形成された。これには畑での麦作において土壌の飛散を防ぐ効果もあった。館林で生産の盛んな、麦の粉を使ったうどんの製麺は、強風と乾燥という、一見デメリットと思われる「赤城おろし」の気候的な特徴を逆に利用している。



写 2-12 からっ風を利用したうどんの製造

(3)観光

館林市の主な観光資源は、知名度の高いつつじが岡公園(国指定名勝「躑躅ヶ岡(つつじ)」を含む)を始めとする自然資源に加え、史跡、神社・寺院、歴史的建造物、歴史的町並みや博物館・美術館などの人文資源、さらにうどんなどの麦を活かした特産物や特色ある飲食産品、数多くの行事・祭事などがある。また、企業の産業博物館が立地し、各種工場では見学ツアーも開催されていることから、産業観光としての側面も有する。本市の令和3年(2021)観光入込客数は484,800人で、令和2年からの新型コロナウイルスの影響により急激に減少したが、令和4年は減少前までには戻らないが増加している。

(千人)

対象 \ 年度	H29年 2017年	H30年 2018年	R元年 2019年	R2年 2020年	R3年 2021年	R4年 2021年
群馬県	64,452,100	65,196,000	66,030,700	40,215,600	40,587,400	52,069,500
館林市	1,708,200	1,634,600	1,497,300	593,900	484,800	1,032,500
つつじが岡公園	111,005	110,741	91,048	0	43,521	63,154
※1	6.5%	6.8	6.1%	0%	9.0%	6.10%

※1 館林市の観光入込客数に対するつつじが岡公園入園客数の割合(%)

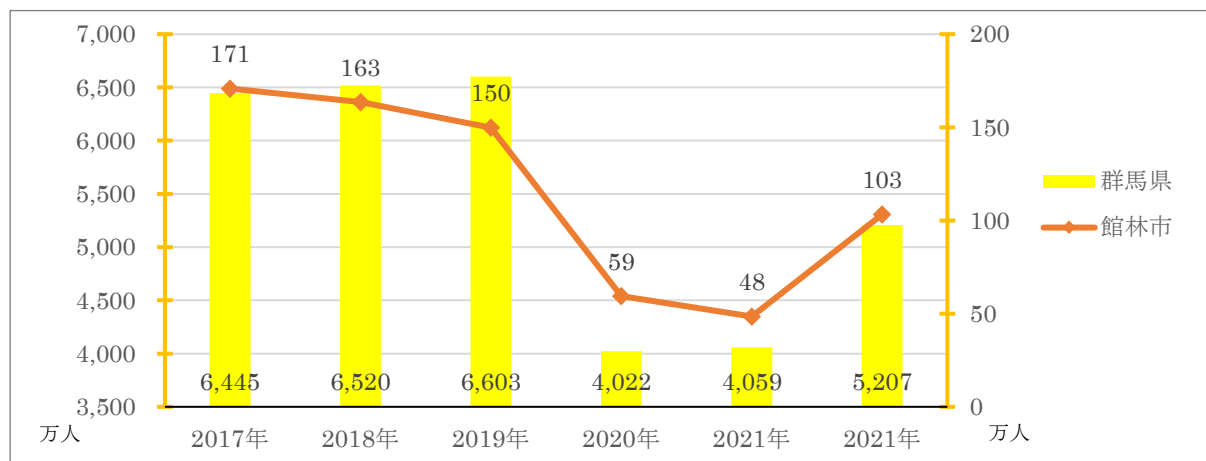


図 2-10 群馬県と館林の観光入込客数の推移

『令和3年観光入込客数・消費額調査(推計)結果』(群馬県観光局観光物産課)をもとに作成

令和4年度(2022)の月別の観光入込客数の動向をみると、観光入込客数 1,032,500 人のうち、31%を占める 326,100 人が、つつじまつりが行われる4・5月に訪れている。群馬県の観光入込客数は8月がピークであるのに対し、本市は4・5月(つつじまつり)にピークがあり、7・8月(夏の城沼花ハスまつり、館林まつり、館林手筒花火大会など)の割合も高いことがわかる。

館林市で現在行われている集客力のある主な催しは、別表のとおりである。

(千人)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
群馬県	4,181	2,681	3,566	4,226	4,885	3,642	4,177	5,833	4,829	5,366	5,453	3,231	52,070.00
館林市	65	35	65	208	118	65	116	115	39	56	91	60	1,033.00
※1	6.2%	3.4%	6.3%	20.1%	11.4%	6.3%	11.2%	11.1%	3.8%	5.4%	8.8%	5.8%	100.0%

※1 館林市の R4 観光入込客数の合計に対する割合(%)

表 2-3 令和4年(2022)月別観光入込客数推計

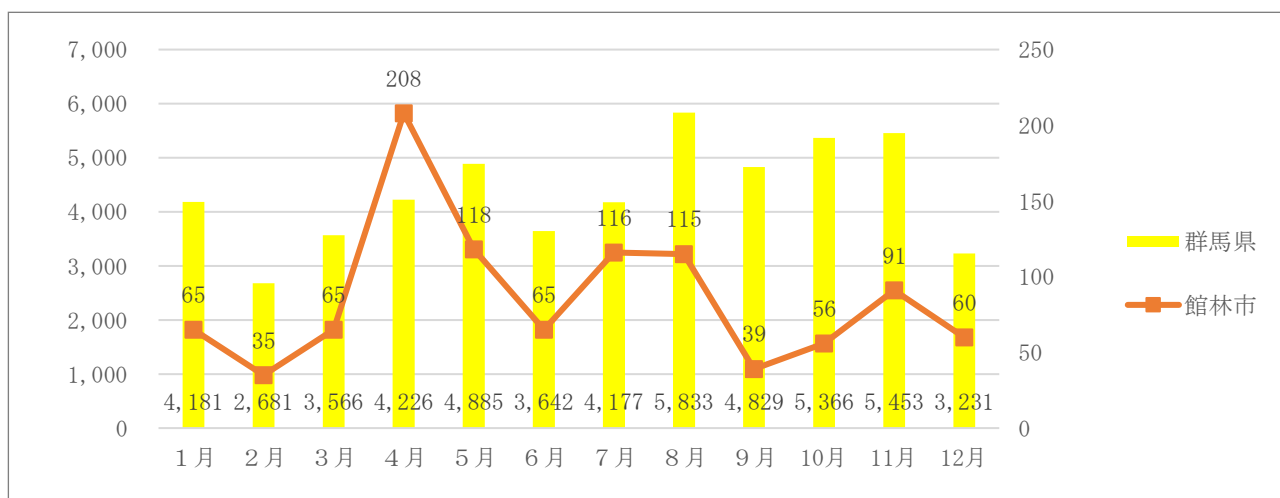


図 2-11 令和4年(2022)月別観光入込客数推計

『令和4年観光入込客統計調査報告書』(群馬県産業経済部戦略セールス局観光魅力創出課)をもとに作成



写 2-13 手筒花火大会(7月)



写 2-14 城沼の花ハスまつり(7～8月)

< 主な集客事業・催し物 >

名称	内容
館林まつり	毎年7月第3日曜日とその前日に開催される。本町通りで民踊流しや迫力ある大人みこしが見られる。起源は、城下町最大の夏祭りであった八坂神社（代官町、現在は代官町長良神社に合祀）の牛頭天王祭 <small>ごずてんのうきい</small> で、昭和初期までは山車 <small>だし</small> を繰り出していた。昭和50年(1975)に市内各地の夏祭りを統合し、現在のように行われるようになった。
たてばやし七夕まつり	毎年8月7日開催。本町通りに140年余りの伝統をもつ竹飾りが並び、夏の風物詩として人々に親しまれている。 かつては、竹の骨組みに紙を貼り中に灯りをともす「竹灯籠」が飾られた。本市出身の作家・田山花袋も、明治44年(1911)に発表した随筆「幼き頃のスケッチ」で、その様子を書いている。竹灯籠は平成26年(2014)頃を境に休止している。
館林さくらまつり	毎年3月下旬～4月上旬開催。鶴生田川兩岸(五号橋～尾曳稲荷神社)、多々良保安林、近藤沼公園などで実施する。
麺-1 グランプリ IN 館林	「食品工業のまち」「麺のまち・うどんの里」の都市イメージアップや地域の農商工連携を目的に、平成23年度より29年度の第8回までは9月下旬～10月頃に館林城ゆめひろばで開催。本市の特産品“うどん”など各種麺料理の店が出店される。
こいのぼりの里 まつり	毎年3月下旬～5月上旬開催。鶴生田川・近藤沼・茂林寺川・多々良沼などで大小約4,000匹のこいのぼりを掲揚。平成17年には、5,283匹の掲揚数でギネス世界記録に認定された。
つつじまつり	毎年4月上旬～5月上旬開催。つつじが岡公園で100余品種、約1万株のツツジが咲き誇る。様々なイベントが開催され、多くの観光客が訪れる。
たてばやし 花菖蒲まつり	毎年6月初旬～下旬開催。館林花菖蒲園(つつじが岡第二公園内)にて、約70品種の花菖蒲が咲く。旧秋元別邸特別公開など様々なイベントも開催される。
夏の城沼花ハス まつり	毎年7月中旬～8月中旬開催。城沼や古城沼では自生のハスが咲き、つつじが岡公園では世界各国の様々な品種の花ハスが展示される。間近でハスを見られる「花ハス遊覧船」も運航される。
館林手筒花火大会 <small>てづつはなび</small>	毎年7月下旬土曜日開催。初代館林城主榊原氏や徳川將軍家発祥の地である三河地方に伝わる、勇壮な「手筒花火」が見られる。
市民菊花展	毎年11月上旬～中旬開催。茂林寺境内で出品者が生育した菊が展示される。
つつじの館林 七福神めぐり	毎年1月3日～1月31日開催。市内の茂林寺(大黒尊天)・長良神社(恵比寿神)・尾曳稲荷神社(弁財天)・普濟寺(布袋尊)・善長寺(寿老尊)・善導寺(毘沙門天)と、邑楽郡板倉町の雷電神社(福祿寿)を巡る。

(4)歴史文化系の展示・見学施設

館林市内には、県立館林美術館をはじめ、市有施設である館林市立資料館、本市出身で明治時代の文豪である田山花袋記念文学館など文科系の展示・見学施設が集中している。

郷土資料は、館林市立資料館が収集・保管、調査研究、公開を行っているほか、田山花袋関係資料の収集、保管、調査研究は、田山花袋記念文学館が行い、ともに文化振興課文化財係が管理している。また、市内には企業博物館など民間の博物館があり、お互いのネットワークを構築している。

施設名	展示状況
群馬県立館林美術館 (担当：群馬県地域創生部文化振興課)	県民に美術作品鑑賞の機会を提供することを目的に、企画展示や群馬県が所蔵する国内外の作品や館林に関わりのある美術品を展示している。
館林市立資料館 (第一資料館・第二資料館) (担当：市教委文化振興課)	郷土の自然科学、歴史民俗資料に関する市民の理解を深め、教育、学術及び文化の発展に資するため、資料の保存・収集・調査・展示などを行う。 第一資料館では、館林城関係資料のほか、郷土の歴史や文化に関する史料を展示する。 第二資料館では、県指定重文「旧上毛モスリン事務所附棟札」と、市指定史跡「田山花袋旧居及び旧居跡附建家売渡証一札」のうち「田山花袋旧居」を敷地内に移築・展示している。
田山花袋記念文学館 (担当：市教委文化振興課)	館林出身で明治時代の文豪、田山花袋の文学的業績の顕彰と地域文学の振興及び文化向上のため、資料の保存・収集・調査・展示などを行う。
<small>たかじょうまち ぶ け や し き ぶ しょうかん</small> 鷹匠町武家屋敷「武鷹館」 (担当：市教委文化振興課)	<small>たかじょうまち</small> 「鷹匠町」と呼ばれた館林城の侍町の一角に市指定重文「旧館林藩士住宅」を移築、元からあった長屋門や附属住宅を修復し、屋敷門や塀などを整備している。 ○主な施設：展示室（長屋門）、会議室（附属住宅）、市指定重要文化財「旧館林藩士住宅」
つつじが岡公園 つつじが岡第二公園 <small>きゅうあきもとべつてい</small> 旧秋元別邸 ほか (担当：市つつじのまち観光課など)	近世からつつじの名所として知られ、毎年「つつじまつり」が開催される。昭和36年(1961)に、最後の館林藩主秋元氏が所有した「旧秋元別邸」が公園に編入された。 ○主な施設：城沼(群馬県館林土木事務所)、国指定名勝「躑躅ヶ岡(ツツジ)」、つつじが岡ふれあいセンター、つつじ映像学習館、旧秋元別邸(担当：市つつじのまち観光課)、館林花菖蒲園(担当：市緑のまち推進課)、城沼総合体育館、城沼総合運動場(担当：市スポーツ振興課)
<small>ちやうこく こ みち</small> 彫刻の小径 (担当：市教委文化振興課、市緑のまち推進課)	本市出身の彫刻家・ <small>ふじのてんこう</small> 藤野天光をはじめとした様々な彫刻家の作品を、多々良沼保安林内の約2kmにわたって野外展示している。

施設名	展示状況
^{けづかきねんかん} 毛塚記念館 (分福酒造株式会社)	江戸末期から酒造業を営む毛塚家の店舗として建てられ、現在は国登録有形文化財(建造物)となっている「 ^{ぶんぶくしゅぞうてんぼ} 分福酒造店舗」を、保存修理のうえ、活用・展示している。
製粉ミュージアム (日清製粉グループ本社)	日清製粉創業期の明治時代に建てられた事務所を活かした資料館で、日清製粉の歴史や製粉の技術について展示している。
カルピスみらいのミュージアム (アサヒ飲料株式会社)	カルピスの製造工程や歴史について展示している。
正田記念館 (正田醤油株式会社)	嘉永6年(1853)に建てられた国登録有形文化財(建造物)「正田醤油正田記念館」を活用し、正田醤油の歴史と、創業当時の醸造道具や江戸から昭和にかけての資料を展示している。
NPO 法人足尾鉍毒事件 田中正造記念館 (NPO 法人足尾鉍毒事件田中正造記念館)	足尾銅山鉍毒事件や ^{たなかしょうぞう} 田中正造に関する調査研究を行うとともに、事件と正造、地域の人々に関する当時の資料を展示している。
向井千秋記念子ども科学館 (担当：市教委向井千秋記念子ども科学館)	本市出身の女性宇宙飛行士向井千秋氏の業績を紹介するとともに、プラネタリウムの投影のほか、宇宙・科学に関する展示、普及活動を行う。
茂林寺本堂宝物館 (茂林寺)	茂林寺は応永33年(1426)創建の曹洞宗の寺院。江戸時代に建てられた茅葺屋根の本堂には宝物館があり、「分福茶釜」を始めとする什宝や、日本遺産「里沼」の「祈りの沼ー茂林寺沼ー」を紹介するパネルなどが展示されている。
群馬県立多々良沼公園 (担当：群馬県館林土木事務所)	平成27年(2015)に全面供用された自然公園で、館林市と邑楽町にまたがる。「自然ふれあいエリア」「いこいと花のエリア」「野鳥と湿原のエリア」「たたら杜のエリア」の4つからなる。公園内にはボランティアセンターがあり、自然ふれあいエリアを中心にイベントが行われるほか、「多々良沼の自然を愛する会」などのボランティア団体による自然環境保全活動の拠点となっている。
多々良沼野鳥観察棟 (担当：市市民環境部地球環境課)	多々良沼北岸の日向漁港にあり、バードウォッチングの拠点となっている。室内には、「多々良」の由来である踏鞴(製鉄)の際にできる鉍滓(カナクソ)の展示や、日本遺産「里沼」の「実りの沼ー多々良沼ー」を紹介するパネルなどが設置されている。



写 2-15 館林市第一資料館



写 2-16 田山花袋記念文学館

4 歴史的概要

(1) 先史・古代

【人間活動の痕跡の発見】

市内では発掘調査の成果から、内陸^{ないりく}古砂丘^{こさきゅう}など比高のある洪積台地上^{こうせきだい ちじょう}で、旧石器時代に当たる約3万～1万6千年前に人間が活動していたことがわかっている。

【集落の形成と人々の交流】

縄文時代には気候が温暖化し、確認できる遺跡や遺物の数は増加する。大袋Ⅱ遺跡^{おおぶくろ}では、縄文時代前期^{たてあな}の竪穴式住居跡7軒分がまとまって発見されている。建替えや拡張の様子が見られ、長期にわたって集落が形成、維持されていたことが分かる。また、市内で

出土する土器に南関東^{かっさか}の勝坂式土器や東関東^{おたまだい}の阿玉台式土器、東北地方^{おおき}の大木式土器などが見られること、石器の素材となった黒曜石^{こくようせき}にも北海道や長野県、神津島産^{こうづしま}のものが使われることから、人々の広範な交流の痕跡を見ることができる。集落跡は各池沼や谷頭の湿地近くの台地上、緩やかな傾斜地(台地縁辺部)で確認されるものが多い。

縄文時代の終わり頃から弥生時代にかけて気候が寒冷化したことで、市内ではこの時代の人々の活動を示す遺跡は少ない。

【集落の発展と古墳の造営】

古墳時代に属する、遺跡や遺物、集落の数は再び増加する。北近藤第一点遺跡では鍛冶遺構^{かじ}や遺跡南方の沼(近藤沼)での使用が考えられる重り(土錘^{どすい})などの漁労関連遺物、八方遺跡では粃穀や土器の貯蔵用施設が確認されるなど、人々の活動の痕跡を見ることができる。集落は中小河川や池沼、谷地に面する縁辺部から台地上を中心に営まれた。

昭和13年(1938)に群馬県が刊行した『上毛古墳総覧』では、市域の古墳として67基が確認されているが、そのうち現存するのは33基である。現存する市域の代表的な古墳としては市指定史跡「山王山古墳^{さんのうやま}」や「淵ノ上古墳^{ふちの うえ}」、高根古墳群^{たかね}、日向古墳群^{ひなた}などが挙げられる。

各古墳の被葬者は明らかでないが、石室を含んだ調査が行われた「高根古墳群」内の「天神二子古墳」では家形・大刀形・人物・馬形など多様な埴輪が、同じく「淵ノ上古墳」では埴輪のほかに直刀や馬具、金環などが確認されており、これら出土遺物から被葬者は地域で大きな勢力を有した人物であることが推定される。

【「大荒城評」と「邑楽」】

国の政治組織や制度が成立した7世紀後期に、館林市域は現在の群馬県に相当する「上毛野国^{かみつげのくに}」(上野国^{こうずけのくに})を構成する、「大荒城評^{おおはらきのこおり}」の一部となった。8世紀初めからは音に合う良い漢字二字をあてて、「邑楽^{おうら}」と表記されるようになった。



写 2-17 北近藤第一地点遺跡（住居跡）

先史・古代の館林市に住んだ人々は、地形や気候に大きく影響を受けながらも、低地と台地の「境目」である台地縁辺部を主な生活の場とし、徐々に台地内部へとその活動範囲を広げた。



図 2-12 先史・古代の遺跡分布図

地質図 Navi「20 万分の 1 日本シームレス地質図 V2」(産総研地質調査総合センター)

(<https://gbank.gsj.jp/geonavi/geonavi.php#13,36.23609,139.54952>) を使用し、館林市が先史・古代の遺跡分布について加筆したものである。

<先史・古代の主な文化財>

名称	概要
旧石器人の痕跡	<p>水溜第一地点遺跡、同第二地点遺跡、山神脇遺跡はナイフ形石器等が確認されている旧石器時代の遺跡であるが、いずれも市内で最も標高の高い内陸古砂丘上に所在する。大袋Ⅰ遺跡や大袋Ⅱ遺跡は城沼南岸の洪積台地にあり、尖頭器などが出土している。</p> <p>同時代の石器が確認されている茂林寺沼西岸の高台にある笹原遺跡や、近藤沼の台地上にある北小袋遺跡のいずれも見晴らしの良い高台上にあり、当時の館林の人々の活動域の共通点を見ることができる。</p>
台地縁辺部の縄文時代のムラ	<p>縄文時代前期を中心に 7 軒の住居跡が発掘された大袋Ⅱ遺跡は、城沼南岸の洪積台地縁辺部に営まれた。縄文時代中期のものを中心に住居跡 13 軒や貯蔵穴が見つかった間堀Ⅰ遺跡は蛇沼東岸の台地縁辺部、同じく縄文時代中期を中心に 20 軒以上の住居跡が見つかった加法師遺跡は渡良瀬川の沖積低地に面する洪積台地の縁辺部から台地上にかけて広がる。</p> <p>これらのムラでは網の重りとされる石錘・土錘などが多数出土しており、台地周辺の池沼や川で漁撈を行った共通性を示している。</p>

名称	概要
<p>台地上の古墳時代の集落</p>	<p>市内における古墳時代の主な集落は、近藤沼北岸の台地上に所在する北近藤第一地点遺跡で90軒以上、旧矢場川南岸の八方遺跡で19軒以上、加法師遺跡で15軒以上、当郷遺跡^{とうごう}で30軒以上の住居がまとまって発見されている。発掘調査の成果から、生活の場である集落は台地上に、その周辺の低地で耕作・採集を行った当時の生活の様子を知ることができる。</p> <p>同時代の市内遺跡からは古代のたたら製鉄で使用された溶鋳炉と送風装置である「鞴・踏鞴^{ふいご たたら}」を結ぶ「羽口^{はぐち}」や、鉄滓^{てつさい}(カナクソ)が出土している。北近藤第一地点遺跡では鍛冶遺構も確認されており、集落内では鉄器の加工(小鍛冶)などが行われていた。また、土製の錘^ど(土玉^{だま})も多く出土し、沼辺や川での漁撈の痕跡が見つかっている。</p>
<p>台地上の古墳群</p>	<p>城沼北岸台地上に築かれた当郷町地内の市指定史跡^{さんのおやま}「山王山古墳」は、墳丘の全長47m、後円部径37m、高さ5mの前方後円墳である。主体部は横穴式石室と推測され、6世紀後半の築造と考えられている。一部が削平されているが、市内に現存する古墳の中で最も良く原形を留める。</p> <p>谷田川北岸の台地上に築かれた「淵ノ上古墳」は墳丘径30mの円墳で、角閃石安山岩の横穴石室が発見されている。発掘調査が行われ、金環(耳飾り)・鉄大刀・馬具などのほか、円筒埴輪や人物埴輪、馬形埴輪、家形埴輪が確認された。</p> <p>群馬県が昭和13年(1938)に刊行した『上毛古墳綜覧^{じょうもうこふんそうらん}』には、多々良沼東岸の内陸古砂丘上に「天神二子古墳^{てんじんふたご}」(全長58m前後の前方後円墳)、「高根古墳群」として35基の前方後円墳及び円墳、渡良瀬川低地や多々良沼の北方に広がる低地を望む台地上の北東部に「日向古墳群^{ひなた}」として24基の円墳があったと記載されている。</p>
<p>「於波良岐」^{おはらぎ}</p>	<p>奈良県の「藤原宮^{ふじわらのみや}」跡から発掘された木簡^{もっかん}に、当時の本市と邑楽郡地域を指す「大荒城評^{おおは(あ)らぎのこおり}」の記載が見られる。現在見つかっている本市に関する最古の文字記録である。</p> <p>平安時代編纂の『倭名類聚抄^{わみょうるいじゆしょう}』では、上野国^{こうずけのくに}(現群馬県)にある「邑楽郡」の読み方を、「於波良岐」としている。また、「邑楽郡」には「池田^{いきた}(伊岐太)」 「疋太^{ひきた}(比木太)」 「八田^{やた}(也太)」 「長柄^{ながら}(ながら)」があったことが記載されている。</p> <p>これらは国の政治組織や制度が確立した時代におけるこの地域の社会の動きを示すものであり、現代の館林周辺地域に残る「邑楽^{おうら}」郡の語源である。</p>



写 2-18 間堀 1 遺跡 (住居跡)



写 2-19 淵ノ上古墳出土埴輪

(2) 中 世

【館林をめぐる戦い】

館林市を含む邑楽館林地域は中世には「佐貫荘」と呼ばれ、鎌倉時代に幕府御家人の佐貫氏一族が勢力をもった。室町時代にはその有力庶子家である舞木氏が、さらにはその家臣赤井氏の下剋上によって実権を奪い、戦国領主として成長を遂げた。同時期の文明3年(1471)の「足利成氏書状」には「立(館)林城」の名があり、本市の名称を確認できる最古の文字史料である。

赤井氏が永禄5年(1562)上杉謙信の関東侵攻で退去したのちは、足利長尾氏や北条氏の支配を受けた。天正18年(1590)の豊臣氏による小田原合戦の後、徳川氏の関東入封に伴って家臣の榑原康政が配置され、近世を迎える。

【中世の信仰】

この時代には、支配者の帰依を受けた多くの社寺が建立された。佐貫氏は荘園鎮守として藤原長良を祀った長良神社を建立した。そのほか、平安時代の『上野国神名帳』に見られる「長柄神社」「雷電神社」「赤城神社」などは、現在も本市やその周辺地域に多く残る。また、「分福茶釜」の伝説を持つ茂林寺もこの時代(応永33年(1426))の創建である。

【地域の開発と生活の変化】

「八方遺跡」は古墳～近世に至る遺跡であるが、中世には下野国佐野に向かう「旧佐野街道」が遺跡中央を通り、渡瀬川本流であった矢場川旧流路の渡河点であった。中世末の16世紀後半～17世紀初頭に陶磁器が多く出土するが、近世に入ると次第に遺物量が減少する。これは日光脇往還や矢場川の流路変更によって交通量が減少したと考えられ、中世から近世に至る交通事情や人々の賑わいの変化を知ることができる遺跡である。

中世には治水・利水のため、河川や沼の開発や改修が行われた。長尾氏家臣大谷休泊による用水開削(休泊堀)や植林(大谷原御林)もこの時期と伝えられている。開削された用水は、現在も館林市を含む東毛地域の基幹水系として地域の農業生産を支える。



写 2-20 市指定重文「館林城跡出土墓石

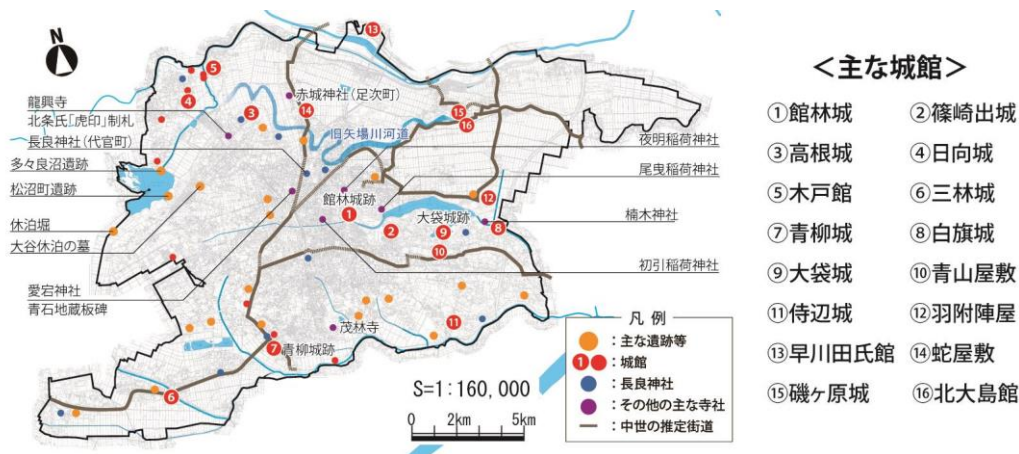


図 2-13 中世の遺跡分布図

< 中世の主な文化財 >

名称	概要
中世城館	<p>市内の中世城館は、低地と台地からなる地形を利用し、池沼や台地の縁辺部のほか、台地上や自然堤防上に見られる。代表例は館林城で、城沼を要害として築城された。城沼にはこのほか大袋城・羽附陣屋・篠崎出城も築かれた。市内にはほかにも地形を利用した城館がいくつも築かれた。</p> <p>【台地縁辺部を利用した城館】青柳城・高根城・日向城など</p> <p>【台地上や自然堤防上に立地する城館】青山屋敷・侍辺城・三林城・北大島館・蛇屋敷・磯ヶ原城・木戸館 など</p> <p>これらのうち、館林城跡・大袋城遺跡・羽附陣屋跡・青柳城跡・北大島館跡・青山屋敷跡では発掘調査が行われている。館林城跡は近世城郭として継続しているため、中世と近世の遺構が混在しているが、本丸から約19mの石組遺構が検出され、そこからは中世末期の陶磁器や瓦などが出土した。</p>
館林城の築城	<p>館林城の築城には、赤井氏が狐(稲荷)に導かれて城の縄張りを定めたという伝説がある。そのため、館林城内や城下には築城伝説にまつわる神社が存在する。</p> <p>○ 尾曳稲荷神社：</p> <p>当時の大袋城主赤井照光が館林城を築城した際、その縄張りを案内した狐を祀る。城郭の東北隅にあたる鬼門の方角に城の守護神として創建されたと伝わる。所在する場所は近世館林城では稲荷郭にあたる。</p> <p>○ 初引稲荷神社と夜明稲荷神社：</p> <p>赤井氏の創建。築城伝説では赤井照光を狐が導いて城の縄張りが決まったとされ、狐が尾で曳き始めた場所に「初引稲荷神社」、引き終わった場所に「夜明稲荷神社」をそれぞれ祀ったという。</p>
製鉄	<p>多々良沼の周辺には製鉄関連の遺跡が存在する。製鉄と巨人伝説には深い関わりがあるとされるが、当地にも「ドンダラサマ」という巨人の伝承が伝わっている。</p> <p>○ 多々良沼遺跡：</p> <p>多々良沼の北岸、現在の日向漁港付近に位置する製鉄生産址。漁港の棧橋周辺の水面下で、多くの鉄滓(カナクソ)が採取できる。平安時代末の万寿2年(1025)、宝日向なる者が蹈鞴を据え製鉄を行ったとされる。</p> <p>○ 松沼町遺跡：</p> <p>多々良沼の東岸に位置する。発掘調査で炭焼窯跡が14基以上確認され、炭が生産されていたことが判明した。多々良沼とその周辺地域では、砂鉄と、製鉄時の燃料となる炭を供給していたものと考えられる。</p>
用水・農地開発	<p>○ 休泊堀：</p> <p>長尾氏家臣大谷休泊の開削とされる。渡良瀬川と多々良沼を水源とした用水路で、上休泊堀・下休泊堀の2つがある。現在の休泊川・新堀川に継承され、東毛地域の基幹水系である待・矢場両堰の主要部を構成する。</p> <p>○ 県指定史跡「大谷休泊の墓」：</p> <p>北成島町の大谷休泊記念公園内にある。正面に「圓寂 大谷休泊関月居士覚位」、右側に「天正六戊寅天」、左側に「八月二十九日」と刻まれている。</p>
名称	概要

<p>麦作と織物</p>	<p>○ 麦作： 中世に台地上や自然堤防上の開発が進み、麦や稗、粟などの畑作が行われた。同時期の『長楽寺永祿日記』（現太田市）には「麵子」や「饅飩」を食した記録があり、小麦粉食文化の浸透を見ることができる。近世館林城主の将軍家献上品に「饅飩粉」が選ばれ、当時から麦が本市の主要作物となっていたことがわかる。</p> <p>○ 織物： 近代の『群馬県邑楽郡誌』に本市では中世から木綿織物が産出されていたと記述があり、近世には農家で綿花栽培が盛んに行われていた。</p>
<p>歴代城主</p>	<p>○ 市指定重文「北条氏「虎印」制札」： 北条氏四代氏政の弟氏邦から出された禁制。天正12年(1584)の高根寺(現在の龍興寺か)宛のものは寺内や付近での乱暴狼藉の停止、同13年(1585)高根之郷宛のものには、離散した農民に帰村を促し乱暴狼藉の禁止が書かれている。</p>
<p>信 仰</p>	<p>○ 長良神社(代官町)： 貞観12年(870)に邑楽郡瀬戸井村(現千代田町)に郡中総鎮守として造営され、館林城築城の際に勧請され、現在地に鎮座したと伝えられる。</p> <p>○ 楠木神社(楠町)： 南北朝時代の武将の、楠木正成の伝説が残る。戦死した正成の遺臣らがその首を笈に納め旅に出て、延元2年(1337)にこの地の大樹の下で休んだが、笈が重くなり背負うことができなかったため首をここに葬り、祀ったとされる。</p> <p>○ 赤城神社(足次町)： 赤城の神の眷属として、氏子はムカデを大切に扱う。社内には市指定重要文化財「千匹ムカデ絵馬」や「ムカデと梅樹絵馬」が江戸時代に奉納されている。</p> <p>○ 市指定重要文化財「不動まんだら板碑」(台宿町)： 永仁5年(1297)3月に造立されたもの。中段に梵字で五大尊や十二天の種子を配した曼荼羅が刻まれている。</p> <p>○ 県指定重要文化財「青石地藏板碑」(西本町)： 文永10年(1273)2月、愛宕神社(西本町)境内に造立された。緑泥片岩を使った地藏画像板碑で、父の菩提を弔うためその子どもたちが建立したと刻まれている。</p> <p>○ 茂林寺(堀工町)： 曹洞宗の寺院で、応永33年(1426)に老僧守鶴を伴った大林正通によって開山される。本堂右手には県指定天然記念物「茂林寺のラカンマキ」があるが、魔よけとして寺創建時に植えられたと伝わる。</p>



写 2-21 多々良沼の鉄滓（カナクソ）



写 2-22 青石地藏板碑

高さ 202 cm、基根部幅 54 cm
頂部幅 51 cm、厚さ 7～9 cm

刻まれた地藏像は左手に宝珠を持ち、右手に「甘露の印」を結ぶと思われる。

(3)近 世



写2-23 県指定史跡「榊原康政の墓附同画像」

【館林城主の変遷】

天正18年(1590)に江戸幕府が開かれて以降、館林は江戸を守る北の要所とされ、親藩・譜代の大名家、すなわち榊原氏・大給松平氏・徳川氏・越智松平氏・太田氏・井上氏・秋元氏が治めた。

徳川四天王の一人と称される榊原康政、5代將軍の徳川綱吉とその子の徳松、6代將軍家宣の実弟松平(越智)清武のほか、老中や奏者番などの幕府要職を務めた藩主も多い。館林が江戸北方の要所として認識されていたことがわかる。

【城下町・交通の整備】

近世に館林城城主となった榊原氏により、館林城と城下町を始めとした市域内の整備が行われた。徳川家康の霊柩が通過した日光脇往還やそのほかの街道(藤岡道、古河往還、太田往還、小泉道)が整備され、宿場も発展した。地形を活かした水運も整備され、市域北部の渡良瀬川には下早川田河岸や渡船場(下早川田の渡し・中の渡し・杉の渡し・一文の渡し)が置かれた。

城下向けの青物・果物を栽培する近郊農業も発達し、村々では副業として木綿が栽培され、加工や販売(糸仲間・綿屋仲間)が行われた。

【文化と名所の発達】

生産流通活動の発展につれて、庶民文化も成長した。歴代城主によって保護された「躑躅ヶ崎」(国指定名勝「躑躅ヶ岡(ツツジ)」)をはじめとし、「高根毛氈山」・「茂林寺」・「桃花園」・「木戸の蜚」などの名所が存在した。城主らによる遊覧の記録も残されているほか、文人らによる遊覧の記録も数多くあり、当時から幅広い人々に親しまれていたことがわかる。



図 2-14 近世の遺跡分布図

< 近世の主な文化財 >

名称	概要
近世館林城	<p>城沼に突出した舌状台地を区画した本丸・二の丸・三の丸・南郭・八幡郭を中心に、稲荷郭・外郭・総郭(武家屋敷街)を内郭とし、大手門を境に西側台地に城下町を配し、全体を堀と土塁で囲っている。</p> <p>榊原康政が城主の時代には、善導寺を始めとした寺院を城下町の虎口付近や城下町縁辺部に集約し、防御施設とした。城沼やその流路を利用して自然の水堀にするなど、本市の地形の特色である台地と低湿地が巧みに利用されている。</p> <p>○ 市指定史跡「館林城跡」「館林城本丸土塁及び八幡宮」：</p> <p>本丸跡と三の丸跡に土塁が残る。三の丸跡に復元された土橋門の周辺には高さ約3mの土塁がめぐらされ、内側には目隠し用の藪土居が残されている。</p> <p>○ 県指定重要文化財「館林城鐘」：</p> <p>応声寺(西本町)にある。徳川綱吉が城主の寛文13年(1673)に鑄造し、城内の時報として使われていた。天和3年(1683)に綱吉の子徳松が没して館林城が廃城となったため、ゆかりのあった応声寺に下げ渡されたもの。</p> <p>○ 市指定重要文化財「館林城絵馬」：</p> <p>尾曳稲荷神社(尾曳町)にある。明治6年(1873)に館林の浮世絵師、北尾重光によって描かれた。翌年焼失した館林城を描いた貴重な鳥瞰図。</p> <p>○ 青龍の井戸(本町二丁目)：</p> <p>徳川綱吉が館林城主の頃、この井戸から女官姿の清瀧権現が姿を現したと伝わる。綱吉の生母桂昌院の信仰が篤く、幕府からも保護された。</p> <p>○ 竜の井(本町二丁目)：</p> <p>かつてこの地にあった善導寺本堂前の井戸。寺が近世に当地へ移ってきた際に、沼に棲む竜神の妻がこの井戸の中に姿を消したとの伝説が残る。</p>
城下町	<p>榊原康政が館林城主となると、文禄2年(1593)から城下町全体を囲む土塁と堀を整備して惣構えとした。城下の出入口に5つの門を配置し、それぞれ主要街道(日光脇往還・太田道・小泉道・藤岡道)につながるようにした。</p> <p>○ 市指定重要文化財「館林城下町絵図」：</p> <p>徳川綱吉が城主の延宝2年(1674)に作成される。城下町の町名や居住者名が記載され、町検断を務めた青山家に伝えられた。</p> <p>○ 市指定史跡「生田萬父祖の墓」：</p> <p>大道寺(本町二丁目)にある。館林城主松平斉厚の時に藩政改革を提唱した藩士生田萬ゆかりの寺で、父母の墓がある。関連する文化財として、市指定重要文化財「生田萬の書跡」がある。</p> <p>○ 市指定重要文化財「旧館林藩士住宅」：</p> <p>秋元家の家臣が住んだ家で、旧外伴木(尾曳町)にあったものを旧鷹匠町(大手町)に移築した。鷹匠町武家屋敷「武鷹館」として、整備・公開されている。</p>

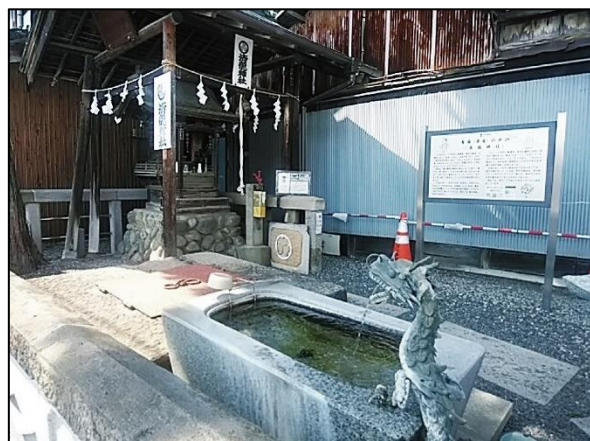
名称	概要
歴代城主	<p>江戸時代の館林は、^{さかきばら}榊原家・^{おぎゅうまつだいら}大給松平家・^{とくがわ}徳川家・^{おちまつだいら}越智松平家・^{おおた}太田家・^{いのうえ}井上家・^{あきもと}秋元家の7家17代の城主が統治した。</p> <p>○ 県指定史跡「榊原康政の墓附同画像」： 善導寺(楠町)にある。康政は善導寺の幡随意上人に帰依し、同寺を菩提寺とした。初代康政、2代康勝、康政の長子大須賀忠政、側室花房氏、殉死者南直道の墓5基が並ぶ。もとは館林駅前にあったが、広場整備のため、平成2年(1990)に現在の場所へ移転した。</p> <p>○ 市指定史跡「館林城主榊原忠次の母祥室院殿の墓および石灯籠」： 城沼北岸の善長寺(当郷町)にある。榊原家は寛永20年(1643)、3代忠次のときに陸奥国白河へ転封となった。</p>
名 所	<p>歴代の館林城主が保護したツツジの名園「躑躅ヶ崎」では、城主だけでなく庶民も花見を楽しみ、館林に花見文化が育まれた。また、市内には“名所”といわれる地がほかにもあり、幕府要職に就くなど江戸に居住することが多かった館林城主たちが領国に来た際には、市内の名所で風景や風情を楽しんだとされる。</p> <p>○ 国指定名勝「躑躅ヶ岡(ツツジ)」： 城沼の南岸にある。近世には「躑躅ヶ崎」と呼ばれ、歴代城主により手厚く保護された。現在もヤマツツジの古木を始めとする約1万株のツツジがある。 つつじの花が咲き、城の水堀でもあった城沼の景観は本市の歴史的特性を象徴し、近代には城下町を中心に都市・行楽文化も育んだ。</p> <p>○ 分福茶釜(茂林寺)： 茂林寺を開山した大林正通のお供であったタヌキの化身「守鶴」が、この茶釜を使って湯を沸かして数千人の客に茶を煎じたところ、いくら汲んでも湯が尽きなかったという縁起を持つ。明治期に巖谷小波による『日本昔噺』に収録された童話『文福茶釜』によって、特に広く知られるようになった。</p> <p>○ 館府八景・館林領八勝歌： 近世館林の優れた景観を詠ったもの。宝暦6年(1756)『館府八景』と、安政5年(1858)『館林領八勝歌』がある。躑躅ヶ崎や背戸谷(瀬戸谷)の蛩、渡良瀬川の舟、早川田の雁行、茂林寺、青柳橋から見える月、松原の桃林などが詠まれる。</p>
躑躅ヶ崎と城沼	<p>『関八州古戦録』や『上野国志』などの記録に「躑躅ヶ崎」の地名がみられ、古くから野生のつつじが自生していたと考えられる。近世館林城の歴代城主によって大名庭園として整備・育成され、花の時期には庶民にも開放された。</p> <p>○ お辻・松女の墓： 城沼北岸の善長寺に供養塔がある。慶長10年(1605)に城沼へ身を投げた「お辻」という女性を弔うもので、併せてつつじを城沼の南岸に植えたという伝承がある。</p> <p>○ 市指定重要文化財「上毛館林城沼所産水草図」： 弘化2年(1845)、当時の城沼に自生した12種類の水草を描いた図譜。</p>

名称	概要
祭 礼	<p>○城下町の祭礼「牛頭天王祭」 旧暦6月6・7日に行われた、「天王社」(八坂神社)の祭り。城下町では旧堅町・旧谷越町・旧足利町に祀られ、本市での起源は慶長年間(1596～1615)といわれる。現在も「館林まつり」の一環として御輿の渡御が行われている。</p> <p>○農村の祭礼「雷電神社の雷除けと嵐除け」 羽附旭町の雷電神社は5月1日に例大祭が行われ、5月末からの麦の収穫が無事に迎えられるよう落雷・降雹・嵐除けの梵天を揚げる。市内には上三林町・上早川田町にも雷電神社が祀られるが、いずれも麦作が盛んな地域である。</p>
城下町の生活	<p>江戸時代の城下町は、人々の生活の場であり、商工業を営む場でもあった。酒や醤油を扱う商家や、木工職人、鍛冶屋の店舗や道具類が現在も残されている。</p> <p>○ 国登録有形文化財(建造物)「正田醤油正田記念館」： 正田醤油(正田家)は江戸時代から旧目車町(栄町)で米穀商を営み、明治6年(1873)から醤油醸造業を開始した。屋号は「米屋」。 嘉永6年(1853)に建築された店舗は現在、「正田醤油記念館」となっている。</p> <p>○ 国登録有形文化財(建造物)「分福酒造店舗」： 分福酒造(毛塚家)は、江戸時代末から旧本紺屋町(仲町)で酒造業を営んだ。屋号は「丸木屋」。その店舗は現在、毛塚記念館となっている。</p> <p>○ 外池商店： 江戸時代から続く近江商人(日野商人)で、醤油醸造や酒造業を営んだ。屋号は「和泉屋」。江戸時代の蔵のほか、昭和4年(1929)の店舗・主屋がある。</p>
農村の生活	<p>江戸時代後期には市域に28の村があり、26か村は館林藩領、2か村(北大島村・野辺村)は幕府・旗本領となっていた。各村には名主・組頭などの村役人が置かれ、年貢の納入など村政をつかさどった。</p> <p>○ 市指定史跡「日向義民地蔵」： 延宝4年(1676)に年貢の取り立てについて直訴したことで処刑された農民を供養するため、元禄年間(1688-1703)に建立されたもの。</p> <p>○ 県指定重要文化財「封内経界図誌」： 秋元志朝が城主であった安政2年(1855)に、城付領内52か村の概況を絵図と明細書によって記したもの。</p> <p>○ 市指定史跡「生祠秋元宮」： 永明寺(赤生田本町)にある。安政3年(1856)の大水の際、館林城主秋元志朝による救済に感謝し、赤生田村民によって安政4年(1857)に建立された。</p>

名称	概要
歴代藩主 ゆかりの地と の交流	<p>○ 榊原家：</p> <p>榊原家とゆかりの深い本市・愛知県豊田市・兵庫県姫路市・新潟県上越市とで「榊原康政公ゆかり四市市長懇親会」（通称「榊原サミット」）を結成し、毎年各市持ち回りで懇談会を開催している。</p> <p>○ 秋元家：</p> <p>最後の館林藩主秋元氏の領地で、江戸時代から交流のある山形県天童市と相互交流協定を平成13年(2001)に結び、交流をしている。</p>
街 道	<p>○ 日光脇往還： <small>にっこうわきおうかん</small> 現在の本町通りにあたり、城下町を南北に縦断する。城下の出入口に江戸口御門・佐野口御門<small>おおつじ</small>が設けられた。江戸時代には城下町のほぼ中央であったことから、「大辻」<small>おおつじ</small>（本町）に高札場<small>ちづか ほんがんづか</small>が設けられた。</p> <p>○ 市指定史跡「千塚の判官塚」： <small>しもつけのくに</small> 下野国佐野や藤岡へ通じる、中世からの街道沿いにある。伝説では源義経が奥州へ落ち延びる際に、この地で休んだことから「判官塚」と呼ばれる。</p>



図 2-15 上野国諸侯配置図（天正十年）



写 2-24 青龍の井戸



写 2-25 封内経界図誌



写 2-26 館林まつりの御輿渡御

(4)近代

【行政区域の変遷】

明治4年(1871)の廃藩置県により館林市や邑楽郡は一時期栃木県に編入されるが、明治9年(1876)に群馬県に編入された。明治22年(1889)4月の町村制施行により、旧館林城とその城下町部分、それに隣接する谷越村^{やごえむら}の一部が合併して館林町が誕生した。

【近代化とまちの発展】

明治40年(1907)に東武鉄道館林駅ができると、館林市の産業は大きな転機を迎えた。地場産業を活かした企業として、食品産業(小麦)では館林製粉(日清製粉)、織物産業では上毛モスリンなどが鉄道開通を機に事業を拡張させ、本市の近代化を進める一翼となった。同時期には街中に、これら近代化に伴う産業の発展で財を成した旦那衆や関係者、鉄道開通によって増加した東京方面からの観光客を主な対象として、花街が形成された。

また、明治5年(1872)の学制公付後は館林市域でも小学校の設、置が進められた。明治6年(1873)に六郷村(現六郷地区)での「刮目学舎」^{かつもくがくしゃ}設置を初めとし、当初はほとんどが寺院の建物を借用するなどしながら、明治9年(1876)にかけて本校5校と分校29校が設置された。

【「足尾鉍毒事件」の発生】

一方で、この時期に発生した「足尾鉍毒事件」は館林市を含む渡良瀬川流域の群馬・栃木・埼玉・茨城各県の広範な範囲に大きな被害を与え、近代化の弊害ともいえる社会問題に発展した。渡瀬村(現渡瀬地区)は被害地域の中心付近に位置し、村内の雲龍寺^{うんりゅうじ}は田中正造を中心とした鉍毒反対運動の拠点となった。



写 2-27 旧秋元別邸

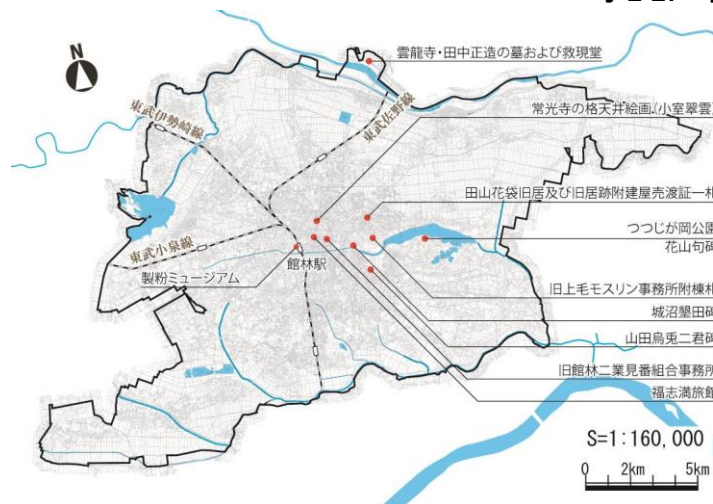


図 2-16 近代の遺跡分布図

<近代の主な文化財>

名称	概要
東武鉄道	<p>機業の盛んな群馬県や栃木県と東京を結び、沿線の産業開発や遠隔地利 用者の利便を図るため、明治30年(1897)に東武鉄道株式会社が設立され た。明治32年(1899)に北千住・久喜間、同40年(1907)に館林を経由して 足利まで、同43年(1910)には伊勢崎に至る116.8kmの全線が開通した。</p> <p>○ 館林駅： 明治40年(1907)に館林停車場として設置された。現在の駅舎は昭和 12年(1937)に改築したもので、木造2階建てで正面に丸時計がはめ込 まれ、その下のアーチ形の2つの飾り窓が特徴的である。平成10年 (1998)に「関東の駅百選」に選定されている。 平成21年(2009)に館林東西駅前広場連絡通路が完成した。</p>
近代産業	<p>近世以前からの地場産業や特産品(織物・小麦)を活かし、明治時代に至っ て西洋技術を取り入れることで、上毛モスリンや館林製粉などの近代産業 が市内に興った。東武鉄道の開通は東京と館林とのつながりをさらに強く し、経済の発展に大きな影響を与えた。</p> <p>○ 県指定重文「旧上毛モスリン事務所附棟札」： つけたりむなふだ 明治29年(1896)に設立した「毛布織合資会社」が明治35年(1902)に 「上毛モスリン株式会社」となり、東武鉄道開通によって、旧館林城二の 丸跡地(城町)に大工場を建設した。 旧上毛モスリン事務所は明治42年(1909)に建築されたもので、木造2 階建ての洋風建築である。</p> <p>○ 館林の織物業： 明治43年(1910)に邑楽織物同業組合により館林織物市場が設立され た。これによって館林の織物業はその規模を拡大した。</p> <p>○ 日清製粉株式会社： 明治33年(1900)、正田貞一郎により「館林製粉株式会社」として創業、東 武鉄道の開通に伴い工場を駅西側に移転、「日清製粉株式会社」となった。 現在の製粉ミュージアム本館は、明治43年(1910)に建築された事務 所で、木造2階建ての洋風建築である。</p>
城沼の開墾	<p>明治維新後の士族授産事業の一環として、旧秋元家家臣の山田烏兎二が やまだうとじ 中心となり、明治17年(1884)から蓮根栽培と養鯉事業が行われた。翌18 年(1885)からは城沼の開墾事業にも着手した。</p> <p>○ 山田烏兎二君碑 (ダノン城沼アリーナ(城沼総合体育館)付近)： 明治33年(1900)に建立された山田烏兎二の功績を讃える碑。</p> <p>○ 城沼墾田碑 (館林城三の丸跡)： あきもとおきとも 明治36年(1903)に建立された秋元興朝を讃える碑。</p>

名称	概要
行楽文化	<p>鉄道の開通を機に、書籍や案内書によって行楽地として広く知られるようになった。</p> <p>駅周辺の観光地として躑躅ヶ岡<small>つつじがおか</small>や茂林寺<small>もりんじ</small>、善導寺<small>ぜんどうじ</small>、城沼<small>じょうぬま</small>、館林城址<small>たてばやしじょうし</small>などが紹介された。大正時代には東京からの「日帰り旅行」が提唱されるようになり、本市出身の田山花袋<small>たやまかたい</small>がその著書で名所を紹介した。郊外で行楽を楽しむ文化は、「行楽文化」として人々に受容された。</p> <p>○ つつじが岡公園（国指定名勝「躑躅ヶ岡(ツツジ)」）：</p> <p>江戸時代に歴代城主によって保護され、多くの領民にも親しまれた。明治維新後は民間へ払い下げられるなど一時期荒廃した。その後、初代群馬県令榎取素彦<small>かとりもとひこ</small>の尽力や地元有志の努力で復興し、明治18年(1885)に「躑躅ヶ岡公園」として開園式が行われた。以後、現代に至るまで東京など遠方からも多くの行楽客が訪れる名所となった。</p>
都市文化	<p>料理屋や芸妓屋が軒を並べていた地区を「花街」といい、館林では明治後期の織物業界の発展に伴って興隆した。</p> <p>明治42年(1909)に芸妓屋の共同出資により、芸妓の幹旋や玉代の精算などを行う「芸妓見番」が堅町に設置され、芸妓屋組合を兼ねた。</p> <p>大正期に料理屋組合との共同資本で運営される「二業見番<small>にぎょうけんばん</small>」となり、手狭になったため谷越町<small>やごえちょう</small>に事務所を移転した。さらに昭和13年(1938)、旧肴町<small>さかなちょう</small>の現在の場所に「館林二業見番組合」の事務所を移転した。</p> <p>見番が移転した頃の肴町は、芸妓置屋や三味線屋、髪結屋、かもじ屋など、「花街」に関連する店舗が並んでいたとされる。最盛期の二業見番には、芸妓約150人が在籍していた。</p> <p>○ 国登録建造物「旧館林二業見番組合事務所」：</p> <p>旧肴町<small>さかなちょう</small>(本町二丁目)にある。昭和13年(1938)に料理業と芸妓業の二業を取り仕切る組合の事務所として建築された。</p> <p>木造2階建てで、入母屋造り・唐破風・千鳥破風で構成される屋根が特徴。2階には芸妓の練習場となる舞台がある。</p> <p>○ 旧花街(料亭・芸妓)：</p> <p>料理屋・割烹旅館として「魚惣本店<small>うおそうほんてん</small>」(明治時代建築)、「福志満旅館<small>ふくしま</small>」(昭和7年建築)などが残る。現在は営業していない。</p> <p>○ 銭湯：</p> <p>明治後期から町内には銭湯が増え、昭和30年頃には13軒が営業していた。当時は娯楽を兼ねた銭湯に多くの人々が訪れたが、家庭に風呂が普及するとその数は少なくなった。平成30年(2018)に「梅乃湯」(仲町)が閉店し、現在営業している店舗はない。</p>

名称	概要
たなかしょうぞう 田中正造	<p>明治20年代以降、足尾銅山から渡良瀬川に流出した鉱毒によって下流沿岸の耕地は大きな被害を受けた。被害民たちの救済を求め、田中正造を中心とした運動が起こった(足尾鉱毒事件)。</p> <p>○ 市指定史跡「田中正造の墓および救現堂」: 足尾鉱毒の被害に立ち向かう人々の拠点であった雲龍寺(下早川田町)にある。大正2年(1913)に没した田中正造の分骨地の一つ。</p>
館林にゆかりのある 近現代の作家・芸術家	<p>○ 小室翠雲(1874～1945): 日本画家。市指定重文「常光寺の格天井絵画」、「溪山幽邃図」(市立資料館所蔵)、「孔雀図」(茂林寺所蔵)など。</p> <p>○ 藤牧義夫(1911～1935?): 版画家。「城沼の冬」(群馬県立館林美術館所蔵)、「隅田川絵巻」(市立資料館所蔵)など。</p> <p>○ 藤野天光(1903～1974): 彫刻家。「鉄工」「古橋選手の像」「輝く太陽」「夢」など。平成15年(2003)、遺族より作品346点が館林市に寄贈された。</p>
たやまかたい 田山花袋	<p>○ 田山花袋(1871～1930): 小説家。父は館林藩士。『蒲団』『田舎教師』などの作品により日本の自然主義文学を確立したほか、多くの紀行文を残した。</p> <p>○ 市指定史跡「田山花袋旧居及び旧居跡 附 建家売渡証一札」: 田山花袋が明治12年(1879)から19年(1886)までのおよそ8年間生活した家で、木造茅葺平屋建22.5坪(74.25㎡)の建物である。 玄関の土間に続いて3畳、左手に8畳が2間、裏に3畳の板の間と土間、東側には4畳と、合わせて5つの部屋があり、近世の武家屋敷であった。</p> <p>○ 田山花袋歌碑: 花袋が城沼を詠んだ和歌「田とすかれ畑と打れてよしきりもすまざるなりたる沼ぞかなしき」が刻まれる。昭和22年(1947)、尾曳稲荷神社境内に建立された。このほか、市内4か所に花袋の文学碑が建てられている。</p>



写 2-28 上毛モスリンの工場働く女性たち



写 2-29 藤野天光「夢」

(5)現 代

【館林市の誕生】

昭和29年(1954)4月、「町村合併推進法」に基づき館林町・郷谷村・大島村・赤羽村・六郷村・三野谷村・多々良村・渡瀬村の1町7村が合併し、現在の館林市が誕生した。

【まちの発展】

昭和30年代以後の高度成長を機に都市型の生活基盤が整備され、農村も含めて生活様式が一変した。昭和47年(1972)には東北自動車道が開通して館林インターチェンジが開業したことにより、館林市は東京近郊の工業地帯として各種工場の誘致が盛んとなった。

また、つつじが岡公園や茂林寺などは東京近郊の観光地としてさらに発展し、館林市を代表する観光資源として、施設を含む整備が進められた。



図 2-17 町村合併図『館林市史 通史編第3巻』より



写 2-30 東北自動車道館林インターチェンジ



写 2-31 工業団地(渡瀬工業団地)

5 地域別の特徴

(1) 市内各地区の地域別特徴

館林市は群馬県東部の東毛地域^{とうもう}に位置し、北は栃木県、東は邑楽郡板倉町^{おうれ}を介して茨城県、南は同明和町を介して埼玉県に接する。古くから県(国)境を越えて栃木県足利市・佐野市、埼玉県行田市・羽生市、茨城県古河市などと交流し、その影響は産業・言葉・食・信仰・芸能など多岐に及ぶ。こうした地理的な条件を背景に、市内各地区で特徴的な歴史文化が形成された。

館林市内は8つの地区に区分されている。その区分は、昭和29年(1954)の合併によって市制施行される以前の、明治22年(1889)に誕生した1町7か村(館林町・郷谷村・大島村・赤羽村・六郷村・三野谷村・多々良村・渡瀬村)に基づく。

① 館林地区

【地区の位置・地形的な特徴】

館林市域の中央部に位置し、市制施行前の館林町を中核とする。近世館林城とその城下町の範囲と一致し、現代まで続く市街地を形成している。地区南側に鶴生田川^{つるうだがわ}が流れ、城沼に流れ込んでいる。

【地区範囲の変遷】

地区北部の坂下町・広内町・東広内町は旧郷谷村の一部、西部の大街道・富士見町・栄町の一部・新栄町は旧多々良村大字成島の一部であったが、市制施行後の町名変更等により、現在は館林地区となっている。



図 2-18 館林地区

【地区内の文化財・歴史的特徴など】

地区内には近世以降のものを中心に、歴史的な建造物が数多く残されている。国登録有形文化財「分福酒造店舗」(仲町、毛塚記念館)、国登録有形文化財「正田醤油正田記念館」(栄町)、「外池商店店舗」(本町二丁目)などがその例である。旧鷹匠町(大手町)に移築された市指定重文「旧館林藩士住宅」は、鷹匠町武家屋敷「武鷹館」^{ぶようかん}として保存・活用されている。

近代以降の館林市の発展を今に伝える産業関連遺産としては、県指定重文「旧上毛モスリン事務所」(城町)、「製粉ミュージアム」(栄町)、「館林駅」(本町二丁目)などがある。近代以降の市街地の賑わいや風俗を伝えるものとして、国登録有形文化財「旧館林二業見番組合事務所」(本町二丁目)や、料理屋・割烹旅館「旧福志満」(本町二丁目)、「旧館林市庁舎」(仲町)などの建造物も残されている。

そのほか、現在の「館林まつり」の起源となった八坂神社の「牛頭天王祭」^{ぎずてんのうさい}、長柄神社の「恵比寿講」^{えびすこう}、法高寺の「お命講」^{ほうこうじ}など、現代まで残る祭礼も多い。

【近代以降の様子】

近代以降は主に商業地・住宅地として発展した。農業従事者は現在に至るまで少ないが、明治中期には土族授産を目的に、城沼で墾田開発事業(蓮根栽培や稲作など)が行われた。地区内の農家の副業として養鶏や養豚も行われ、大正時代には城沼で漁業組合が創立されるなど、多様な産業が試みられた歴史も有する。

現在は商工業地と住宅地のほか、市役所など公共施設、市文化会館や図書館などの文化施設として利用されている。



写 2-32 日光脇往還(かつての本町通り)

【館林城と城下町の遺構】

旧城下町を囲む外堀と城を囲む内堀が館林地区の中にあったが、現在はほとんどが埋め立てられている。堀と共に城下町と城外とを隔てていた土塁も一部が残るのみである。

館林城の跡地は現在、本丸は向井千秋記念子ども科学館や田山花袋記念文学館、二の丸は市役所、三の丸は市文化会館や図書館となっており、遺構はほとんど残されていない。城と城下町の建物や工作物は大部分が消滅しているが、当時の町割りは今でも残されており、城下町の要所に配置された社寺もその多くが残存している。



写 2-33 館林城絵図



写 2-34 市指定重文「秋元泰朝所用
具足(卯花糸威金箔伊予札胴具足)」

②郷谷地区

【地区の位置・地形的な特徴】

市域東部に位置し、地区東で
邑楽郡板倉町に接する。地区北
部には旧渡良瀬川(旧矢場川)の
氾濫原に由来する低地が広が
り、現在は広大な水田地帯とな
っている。近世以来の集落は、主
に自然堤防上に築かれている。



図 2-19 郷谷地区

【地区範囲の変遷】

地区の範囲は主に市制施行前の郷谷村(近世の当郷・新当郷・田谷・四ッ谷の4か村が合併)にあたる。市制施行後、旧郷谷村大字当郷の一部と大字新当郷の一部が現在の館林地区へ編入、旧城下町の大字館林字外加法師や大字当郷の一部が統合された加味師町が郷谷地区へ編入されるなどの範囲変遷も見られる。昭和63年(1988)に新当郷と当郷の町名が変更され、現在に至る。

【地区内の文化財・歴史的特徴など】

地区南部は城沼に臨み、地区内の当郷町にある善長寺と対岸の国指定名勝「躑躅ヶ岡(ツツジ)」とを往復する渡船が時期限定で運行している。また、善長寺には近世館林城3代目城主榑原忠次の母、市指定史跡「祥室院殿の墓」や、市指定史跡「山王山古墳」がある。そのほか、源義経が奥州に落ち延びる際に休息したと伝わる千塚町の市指定史跡「千塚の判官塚」は、近世以前から栃木県方面に通じる街道沿いにある。

【近代以降の様子】

昭和20年代末頃まで地区内土地の8割弱が田畑として利用された。農業のほか、副業として養蚕や機織業、城沼での漁業、葦や真菰の採取、蓮根の栽培も行われた。地区内に多い低湿地では、水辺環境を巧みに活かした「掘上田」や「浮田」と呼ばれる手法で稲作が行われていた。

地域内の主要産業は農業である。米麦生産のほか、ビニールハウスを利用したキュウリの促成栽培なども盛んである。



写 2-35 市指定史跡「館林城主榑原忠次の母 祥室院殿の墓および石灯籠」



写 2-36 城沼の蓮根畑

③大島地区

【地区の位置・ 地形的な特徴】

市域北東部に位置し、地区東は^{おうら}邑楽郡板倉町に接する。北を流れる渡良瀬川は、栃木県(佐野市)との市境である。地区内の標高は14~18mと、市内で最も低い。



図 2-20 大島地区

【地区範囲の変遷】

地区の範囲は市制施行以前の^{しもつけのくに}大島村に一致する。近代以前の集落は地区北部の自然堤防上に点在する。江戸時代には一時期^{しもつけのくに}下野国に属したが、のちに^{こうづけのくに}上野国邑楽郡に付け替えられた。その際、同じく邑楽郡内にあった南大島村(現明和町南大島)と区別するため「北大島村」としたが、明治22年(1889)の町村制施行の際に「大島村」と改称した。

市制施行後は村全体を「大字大島」とし、昭和59年(1984)の町名変更によって「大島町」となり、現在に至る。その後の平成期には地区内に住宅団地「リバーサイド大島」が作られた。

【地区内の文化財・歴史的特徴など】

地区北側を流れる渡良瀬川は水田用水や舟運に活用され、「杉の渡し(山王)」、正義内地区に「中の渡し」、岡里地区に近い西岡新田(邑楽郡板倉町)に「一文の渡し」が設けられるなど、対岸(現栃木県佐野市)との交流が盛んであった。地区内の大島神社で奉納される「^{おおしまおかざとかみよ}大島岡里神代神楽(太々神楽)」[市指定無形民俗]は、明治初年に渡良瀬川対岸の佐野市から伝わったとされる。

一方で、市内各地区で最も標高が低いこともあり、渡良瀬川からの水害を多く受けた。水害に備え、一時避難場所の「^{みづか}水塚」や、避難に使う「^{あぶね}揚げ舟」などの暮らしの知恵が残る。

地区内を東西に貫く「主要地方道館林藤岡線」は中世から街道として機能し、館林市と藤岡(現栃木県栃木市)・邑楽郡板倉町方面との交通を現在も支えている。

【近代以降の様子】

近代以前はほぼ純農村で、副業として養蚕や織物業(賃機)が行われた。地区の東部は旧渡良瀬川(旧矢場川)の氾濫原の低地であり、水田地帯となっている。現在の大島地区も広大な農地を利用した農業が盛んであるが、地区の東部には昭和・平成期に工業団地が造成され多数の企業が進出するなど、産業構造に変化が見られる。



写 2-37 水塚 (大島地区)



写 2-38 揚げ舟 (大島地区)

④赤羽地区

【地区の位置・地形的な特徴】

市城南東部に位置する。南は谷田川を境に^{おうら}邑楽郡明和町、東は同郡板倉町と接する。近代に至るまで地区内で水稲栽培に適した土地が限られ、平坦な地区中央部は畑作地帯として活用された。

【地区範囲の変遷】

地区の範囲は市制施行以前の赤羽村（^{あこうだむら}赤生田村と^{はねつくむら}羽附村が合併）の範囲とほぼ一致する。昭和61年(1986)の町名変更によって大字赤生田が^{あこうだ}赤生田町・^{あこうだほん}赤生田本町・^{かみあこうだ}上赤生田町に、大字羽附が^{はねつく}羽附町・^{はねつくあきひ}羽附旭町・花山町・楠町となった。

【地区内の文化財・歴史的特徴など】

地区内には、県指定史跡「^{さかさげらやすまさ}榊原康政の墓」(^{ぜんどうじ}善導寺)や、洪水の際に民衆を救済した館林城主^{あきもとゆきとも}秋元志朝を祀る市指定史跡「^{せいしあきもとぐう}生祠秋元宮」(^{えいめいじ}永明寺)などがある。そのほか、市指定重文「銅鐘」(^{ふきいじ}普濟寺)は地元住民が近世初期に下野天明(^{しもつけてんみょう}栃木県佐野市)の^{いもじ}鋳物師に造らせて寄進したもので、地域間の交流を知ることができる。

国指定名勝「^{つづじ}躑躅ヶ岡(ツツジ)」は城沼南岸にある。近世からツツジの名所として、歴代の館林城主の保護を受けた。近代以後は東武鉄道が館林と東京を結び東京近郊の観光名所・行楽地となり、現在まで続く本市最大の観光資源である。

【近代以降の様子】

地区中央部を中心に畑作が行われた。陸稲や麦のほか土壤に適した蔬菜の栽培が広く行われ、カボチャやキュウリなどの栽培は現在も盛んである。過去には副業として養蚕業や機織業、城沼での水産業も行われたが現在では見ることはできない。

地区内には中世から館林市と茨城県古河市を結ぶ街道として機能した「古河往還」がある。現在はほかに高崎市から茨城県銚田市を結ぶ国道354号が通り、昭和47年(1972)に開通した東北自動車道館林ICが置かれるなど、市域の交通・物流の拠点となっている。



図 2-21 赤羽地区



写 2-39 市指定史跡「生祠秋元宮」

⑤六郷地区

【地区の位置・地形的な特徴】

市域南部中央に位置する。地区の西で^{おうら}邑楽郡邑楽町と、南で谷田川を境に同郡明和町と接する。

地区北部は邑楽館林台地の上部にあるが、地区南部から西部にかけて低地が広がることから^{へびぬま}蛇沼や茂林寺沼、近藤沼など貴重な動植物が生息する池沼が多く点在する。



図 2-22 六郷地区

【地区範囲の変遷】

地区の範囲は市制施行以前の旧六郷村(近世の^{しんじゅく}新宿・^{こくわばら}小桑原・^{あおやぎ}青柳・^{ほりく}堀工・^{こんどう}近藤・^{まつばら}松原村が合併)とほぼ一致する。近世には「日光脇往還」が地区内を南北に縦断し、新宿村・小桑原村・青柳村に杉並木が形成された。また、近藤村は範囲の大半が藩有林「大谷原御林」であった。市制施行後、昭和44年(1969)・昭和60年(1985)・平成3年(1991)以降の町名変更を経て、現在に至る。

【地区内の文化財・歴史的特徴など】

富士原町富士原神社は近世から地域の富士信仰・富士講の拠点となった神社である。同神社に伝わる市指定重要有形民俗文化財「富士原の^{せんげんづか}浅間塚及び^{はつやま}初山関連資料」は、地域の富士浅間信仰や、富士原神社の境内で子どもの成長を願って行われる「初山行事」や「火祭り」などの行事について伝える文化財群である。

「^{ぶんふく}分福(文福)茶釜」で知られる^{もりんじ}茂林寺は室町時代の開山で、明治時代の鉄道開通後は地区内に茂林寺前駅が置かれるなど、「躑躅ヶ岡」と並ぶ本市有数の観光名所となった。境内に県指定天然記念物「茂林寺のラカンマキ」、寺の北側に低地湿原の様相を良く残す県指定天然記念物「茂林寺沼及び低地湿原」があり、多くの人が訪れる。



写 2-40 富士嶽神社(富士原町)

【近代以降の様子】

近代以前には地区内の池沼や低地を利用し、水田^{かんがい}灌漑が行われた。アジア太平洋戦争末期には地区内(近藤町・大谷町)に旧陸軍館林飛行場が設けられたが、その敷地は終戦後に開拓地となり、現在は多くの工場が進出している。隣接する館林地区とともに、市内でも特に市街地化が進み、人口は市内各地区で最も多い。

⑥三野谷地区

【地区の位置・地形的な特徴】

市域南西部に位置する。地区の南東側は谷田川を境に^{おうらくん}邑楽郡明和町、南西側は同郡千代田町、北側は同郡邑楽町と接する。地区南に谷田川が、中心部に^{しんぼりがわ}新堀川(下休泊堀)^{しもきゅうはくぼり}が流れる。



図 2-23 三野谷地区

【地区範囲の変遷】

地区の範囲は市制施行以前の三野谷村と一致する。明治22年(1889)に近世の^{かみみばやし}上三林・^{しもみばやし}下三林・^{のべ}野辺の3か村と、^{いりかや}入ヶ谷村の谷田川以西の地域が合併して誕生した。

【地区内の文化財・歴史的特徴など】

上三林町の^{らいでん}雷電神社で伝承される市指定重要無形民俗文化財「上三林のささら」は、江戸時代に利根川対岸の^{むさしのくにしもちやうじやう}武蔵国下中条(現埼玉県行田市)から伝わった。棒術・獅子舞・笛で構成され、五穀豊穰・無病息災を願い、現在も旧暦8月15日頃に奉納される。かつては同地区内下三林町でもささらが行われていたが、現在は途絶えている。

地区の水利は主に多々良沼の分水で谷田川に合流する下休泊堀と、利根川用水から^{やたがわ}谷田川に入る^{みとうおうぼり}明王堀の二つに分かれる。一方で、下三林町近藤沼付近や上三林町^{はねま}羽沼の周辺は低湿地も多く、以前には「掘上田」や「浮田」と呼ばれる手法で稲作が行われていた。

【近代以降の様子】

地区内の近藤沼・羽沼・谷田川では、かつて鰻や鯉、鯰や鮒などを漁獲する水産業が盛んであり、大正期には近藤沼で漁業組合が組織された。現在は漁業を生業にしている者はいないが、近藤沼を中心にレジャー用の釣り場が設けられるなど、時代による変化は生じつつも今も多くの人々が沼や川からの恩恵を受けている。



写 2-41 近藤沼

地区内の農業は広大な農地を利用した米麦の生産が盛んであり、市内でも特に農業生産量の多い地区である。その一方で、1970年代には地区内の野辺町に大規模な工業団地が作られるなど、工業地帯としての発展も見る事ができる。

⑦多々良地区

【地区の位置・地形的な特徴】

市域北西部に位置し、面積は市内各地区で最も広い。地区の北を矢場川が流れ、それを市境として栃木県足利市と、地区の西では多々良沼を挟んで邑楽郡邑楽町と接する。地区の大部分が邑楽館林台地の上にあり、高根町には市内で最も標高の高い地点（33.2m）がある。

【地区範囲の変遷】

市制施行前の多々良村（近世の成島・高根・木戸・日向、谷越村の一部）が主な範囲である。昭和40年（1965）から平成12年（2000）までの町名変更等により、現在の町名と範囲になった。

【地区内の文化財・歴史的特徴など】

「多々良沼」の名は、古代に「宝日向」と呼ばれた人物が沼近くで踏鞴場を設け、鋳物を行ったことに由来する伝承がある。付近には製鉄に関する巨人伝説「日向のドンダラサマ」が伝わる。

地区内には中世邑楽館林地域で農地開墾や山林植栽、堀の掘削を行ったとされる「大谷休泊」に関連し、県指定史跡「大谷休泊の墓」（北成島町）がある。また、地区内龍興寺には北条氏や榊原氏の制札や禁制も残るなど、中世館林の状況を示す文化財が残されている。近世のものとしては、役人の不正を訴え近隣農民を救ったものの処刑された名主らを祀る「日向義民地蔵」がある。

【近代以降の様子】

明治、大正期には東武伊勢崎線と中原鉄道（現東武小泉線）が開通し、日向に「中野駅」（現多々良駅）が開設された。開設の背景には隣接する中野村（現邑楽郡邑楽町）で盛んであった「中野緋」の輸送手段の確保があるが、多々良地区内に駅が置かれたことから、地区内に機織業に従事する者が多くいたことがわかる。そのほか、多々良沼を中心に鯉・鮒などの水産業も盛んに行われた。

現代では鉄道駅が2つある利便性や、県立美術館の設置やそれに伴い整備された良好な周辺環境などを背景に、宅地化が進んでいる地区である。



図 2-24 多々良地区



写 2-42 県指定史跡
「大谷休泊の墓」

⑧渡瀬地区

【地区の位置・地形的な特徴】

市域北部中央に位置する。地区北に渡良瀬川とその支流の矢場川が流れ、栃木県足利市・佐野市との市境となっている。

【地区範囲の変遷】

市制施行前の渡瀬村(近世下早川田・上早川田・傍示塚・足次・大新田・岡野の6か村が合併)の範囲とほぼ一致する。昭和59年(1984)の大字廃止により、現在の町名となる。

【地区内の文化財・歴史的特徴など】

近世には下早川田町に「下早川田の渡し」が設けられ、徳川家康の日光改葬の際は霊柩が下早川田村から対岸の下野国に渡った。その後も「日光脇往還」の一部として、交流や流通で大きな役割を果たした。また、「下早川田河岸」も設けられるなど、江戸とやり取りする拠点となった。

下早川田町の雲龍寺には大正時代の足尾銅山鉱毒事件の際に鉱毒事務所が置かれ、公害闘争の拠点となった。境内には指導的な役割を果たした田中正造の遺骨を分骨した市指定史跡「田中正造の墓および救現堂」がある。足次町赤城神社にある市指定重文「ムカデと梅樹絵馬」は、近隣地域に多くの作品を残す浮世絵師北尾重光の作であり、地域の人々の信仰の様子を示す。

【近代以降の様子】

近代になると明治期の鉄道開通によって舟運は衰退したが、大正3年(1914)には東武鉄道佐野線が開通し、渡瀬地区内にも駅が開設された。近代以降には兼業としての養蚕や機業(賃織)が盛んとなり、上早川田では多くの農家が養蚕を行ったが、地区内には現在も家屋が残されている。

灌漑により整備された肥沃な農地を利用した米麦二毛作は現在も盛んであるが、昭和30年代以降は多くの工業団地・産業団地が整備され、工業地帯の一面も持つ。

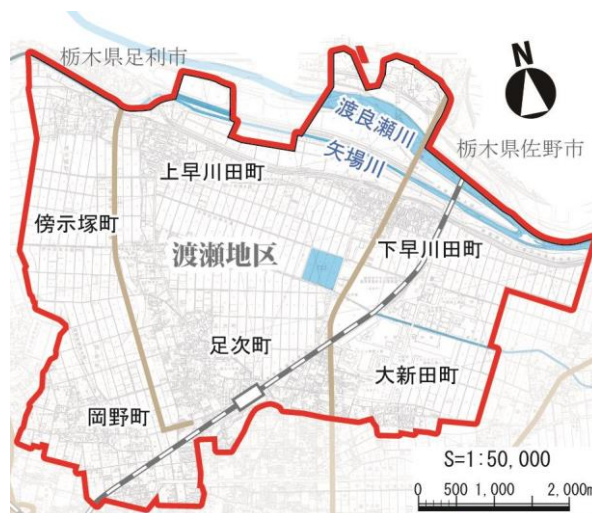
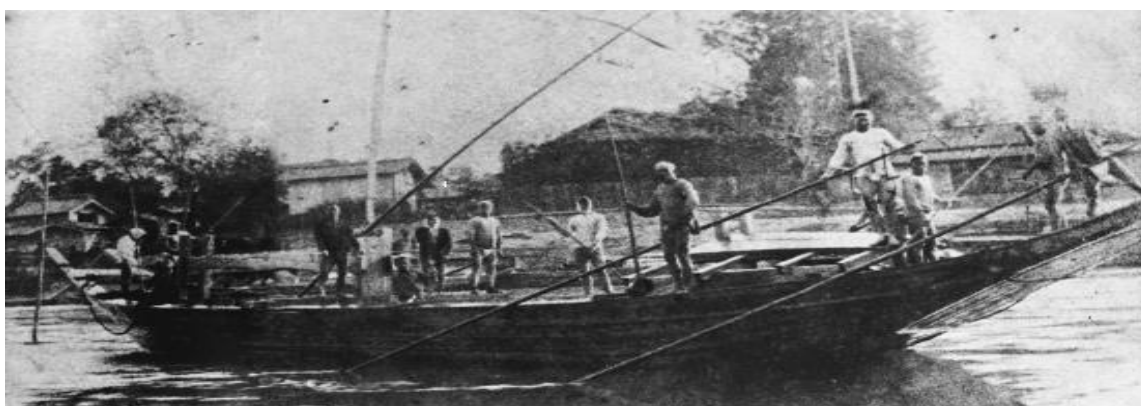


図 2-25 渡瀬地区



写 2-43 渡良瀬川の早川田河岸(明治 30 年頃)

<各地区の主な祭り>

市内の各地区では社寺で行われるものとは別に、コーチ*ごとの祭祀も行われている。小規模なものが多く一部で断絶も見られるが、現在も継続されているものも多い。また、イッケ(同族の親族組織)独自の伝承や祭祀も残されている。

市内では邑楽郡固有の神社とされる「長良神社」など、地域特有の社寺やその祭りが継承されている。

*コーチ：元は耕地。本県全域で使われる。家のまとまった、一定範囲の集落のこと。

名称・開催地	内容
^{こまがた} ^{ゆみとりしき} 駒方神社の弓取式 【赤羽地区・上赤生田町】	1月25日の例大祭で開催。神主や役員らが矢を射て、その年の吉凶を占う儀式。矢は ^{よし} 葦、弓はウツギの木を材料とし、毎年新しく作る。
^ね ^{じんじゃ} 子神社の大祭 【赤羽地区・赤生田本町】	足腰の神として信仰を集める、子神社(子の権現) ^ね ^{ごんげん} の大祭。3月15日に行われ、参拝客はステンレス製の草鞋に願い事を書き、奉納する。かつて草鞋は藁 ^{わら} を編んだものだったが、参拝者が多いため、大量生産できるようにと戦後にカネ(金属製)の草鞋に変わった。
^ふ ^{じたけ} ^{はつやま} 富士嶽神社の初山大祭 (初山参り) 【六郷地区・富士原町】	富士浅間信仰に基づくもので、参拝に来た乳児の額に朱印を押し、健やかな成長を祈る。境内などで販売される「初山うちわ」を購入し、出産祝いのお返しとして親戚などに配る風習がある。 かつては旧暦6月1日に大祭、その前日に宵宮を開催した。現在は新暦6月1日に大祭、同5月31日に宵宮を行う。
富士嶽神社の初山大祭 (初山参り) 【赤羽地区・花山町】	富士浅間信仰に基づくもので、参拝に来た乳児の額に朱印を押し、健やかな成長を祈る。「初山うちわ」を購入し、出産祝いのお返しとして親戚などに配る風習がある。 かつては旧暦6月1日に大祭、その前日に宵宮を開催した。現在は新暦5月1日に大祭、同4月30日に宵宮を行う。
長良神社の節分祭 【館林地区・代官町】	2月3日の節分祭に、豆撒きや福豆の授与が行われる。
^{えびすこう} 長良神社の恵比寿講 【館林地区・代官町】	長良神社境内の西宮神社 ^{にしのみや} の祭礼で、商売繁盛や招福の熊手などを売る露店が並ぶ。
^{ぎんなん} 長良神社の銀杏祈願祭 【館林地区・代官町】	12月下旬開催。境内で採れた銀杏を祈祷し、お守りとして配布する。
^{じょうらくじ} ^{ろくさんよ} 常楽寺の六算除け 【多々良地区・木戸町】	1月4日開催。護摩を焚き、祈祷を受ける。以前は数え年4歳の子どものみを対象としていた。
^{じんだいじ} ^{ひぎり} 深諦寺の日限地蔵の供養祭 【多々良地区・木戸町】	1・8月の16日に開催。昭和初期までは多くの参拝者で賑わった。日限地蔵の開帳は50年に一度行われる。

名称・開催地	内容
善長寺の子育十一面観音の縁日【郷谷地区・当郷町】	1月17日開催。子育安産祈願にご利益があり、現在も妊婦に紅白の腹帯を貸与している。
茂林寺の守鶴尊大祭【六郷地区・堀工町】	1月28日開催。分福茶釜伝説に登場する守鶴和尚にちなむ祭礼。守鶴堂で経をあげ、分福茶釜のお札と守鶴和尚のお札・御供物を頒ける。
法高寺の御命講【館林地区・朝日町】	日蓮宗の開祖・日蓮上人の命日(旧暦の10月13日)の前日(御帶夜)に行う。3～6歳の子どもが市街地から法高寺までを歩く稚児行列や、僧侶による水行が行われる。昭和後期まで御命講の名物とされる干柿が出店で売られていた。
法高寺の焙烙灸の呪い【館林地区・朝日町】	7月土用の丑の日に開催。頭痛封じ及び熱射病予防のため、参拝者の頭上に焙烙を載せてお灸を据える。この日は肌守りも頒けられる。
獅子の土用干し【渡瀬地区・足次町】	八朔(8月1日)の節句に足次町北部の3コーチ(岡崎、堀之内、新屋敷)で行われる厄払いの行事。 かつては雄獅子が雌獅子2頭を引き連れて、村内の各家に土足で上がって邪気を払い、無病息災を祈った。土足で上がり込まれるため、各家は一斉に畳を上げ庭に干したことが、「土用干し」のいわれという。 獅子の収納箱の記載から、江戸時代に始まったと考えられる。 住宅事情の変化により、一時は赤城神社で獅子頭を祀って直会を行うだけだったが、その後に復活。現在は8月1日に近い日曜日に、男子中学生3人が獅子となり、玄関先で厄払いを行う。
初市【館林地区本町、同仲町】	毎年1月18日に開催される。旧連雀町(本町)から旧材木町(仲町)までの通り沿いに、縁起物のダルマの市が並ぶ。
どんど焼き【市内各地】	小正月の行事で、各家から持ち寄った注連飾りやダルマ、古いお札などを焚き上げる。地区行事として行うことが多い。 大島町では大島神社、上早川田町では雷電神社、日向町では長良神社などで行われる。堀工町では現在、地区内のふれあい運動広場で行っているが、もとは熊野神社の境内で行われていた。



写 2-44 駒方神社の弓取式



写 2-45 初市

<各地区の主な芸能>

市内で継承される芸能には、本市が国（県）境として、多くの地域と交流してきた歴史や特性を反映したものがみられる。「大島岡里神代神楽」は渡良瀬川を隔てた栃木県から、「上三林のささら」は利根川を隔てた埼玉県から伝わったとされ、「八木節(盆踊り)」は県内太田市や桐生市、栃木県足利市や佐野市など近接する地域で盛んに行われている。これらは人々の活発な交流を示すものといえる。

名称・開催地	内容
木戸のささら 【多々良地区・木戸町】	<p>「雨乞いささら」とも言われ、暑さが厳しくなる7月下旬に行われる。木戸町深諦寺を出発し、地区内各地を巡行する。社寺や村境では厄払いとして獅子舞を奉納する。</p> <p>3頭1人立の獅子と、柳生流の棒術、花(万灯)で構成される。</p> <p>天正年間(1573～1592)の大洪水で邑楽郡中野村から獅子頭が深諦寺裏に漂着し、住職が村民に踊りを教えたのが起源とされる。</p>
羽附のささら 【赤羽地区・羽附旭町 (新興、白旗、長竹)】	<p>旧暦3月3日と旧暦6月15日に近い日曜日に行われる。羽附旭町の新興・白旗・長竹の「ささら三コーチ」で行われる。</p> <p>3頭1人立の獅子で、棒術はない。その年の「宿」（獅子を預かる家）でささらを奉納した後、各コーチ内の厄を払って歩き、宿に戻る。</p> <p>夏の祭礼では、巡行から戻った後、1年間宿を務めた家で「ジンギ(仁義)の舞」を奉納する「宿送り」の儀式が行われる。その後、次の宿へ移動し、宿送りと同じ演目を奉納して終了となる。</p> <p>かつて地区内にあった白旗城主へ奉納したのが起源と言われる。</p>
市指定重要無形民俗文化財 「上三林のささら」 【三野谷地区・上三林町】	<p>上三林町の雷電神社の秋季大祭(旧暦8月15日に近い日曜日)で奉納される。かつては豊作の年のみ奉納されていたが、現在は隔年で行う。昭和57年(1982)から地区の子どもたちを対象に継承活動を行う。子どもたちだけの奉納は毎年実施している。</p> <p>3頭1人立の獅子と柳生新陰流と伝わる棒術で構成される。江戸中期に武州忍下中条(現埼玉県行田市下中条)より伝わったとされる。</p> <p>例大祭では、雷電神社前で棒、獅子舞を奉納し、地区内の八坂神社、十九夜堂、本郷集会所、雷光寺を巡行する。</p> <p>昭和40年(1965)まで下三林町でも「下三林のささら」が行われていたが、現在は行われていない。</p>
市指定重要無形民俗文化財 「大島岡里神代神楽 (太々神楽)」 【大島地区・大島町】	<p>大島町岡里地区の敬神講により、大島神社の例大祭に奉納される。戸ヶ崎流と称し、古風な格式高い形式を保つ。演目は「幣舞式者」などの「式舞」7座と、「金山」などの「興舞」5座の計12座。</p> <p>大島地区は渡良瀬川対岸の現栃木県佐野市と、近代まで渡し船を使った交流が盛んであり、神楽も対岸の飯田(現佐野市飯田町)近辺から、「渡し」を介して明治初年に伝わり、定着したとされる。</p> <p>その後は祭礼のほか、神葬祭や盆行事(御霊祭り)にも神楽が奉納され、村人の生活と深い関わりを保ち、継承されてきた。</p> <p>邑楽郡板倉町の高鳥天満宮、県外の佐野市や栃木市藤岡町でも神社に招かれ、奉納している。</p>

名称・開催地	内容
<small>あしつぎ</small> 足次神楽(太々神楽) 【渡瀬地区・足次町】	<p>慶応3年(1867)に江戸「きのえね屋」から伝授され「足次村太々神楽講」を作ったのが起源とされる。足次赤城神社の春秋の祭り(4月15日、10月15日)に奉納され、演目は「翁<small>おきな</small>さま」「天<small>あま</small>の岩戸<small>いわと</small>」「猿田彦命<small>さるたひこのみこと</small>」などで、囃子は太太鼓、小太鼓に笛。</p> <p>足次神楽は「ひょっとこ」の名称で親しまれ、富士原町の富士嶽神社や佐野市などでも依頼に応じて、奉納した。後継者不足のため昭和30年代に一時中断、昭和50年代に一時復興し子どもにも指導して赤城神社の秋季例大祭などで奉納していたが、現在は再度休止中。</p>
<small>やぎぶし</small> 八木節(盆踊り) 【市内各地】	<p>酒樽を逆さにしてバチで叩き、その調子に合わせて踊るもので、田山花袋の随筆「幼き頃のスケッチ」(明治44年(1911))には「盆踊り」として描かれている。</p> <p>大正時代には村の若衆が毎晩集まって練習をし、ほかの村の若衆と競い合う「八木節大会」も行われた。</p> <p>現在も市内各地区に「八木節保存会」があり、地区の祭りや公民館祭りなどで披露されるほか、昭和58年(1983)のあかぎ国体の開催を機に「館林市八木節連合会」が組織され、現在も活動が続いている。</p>

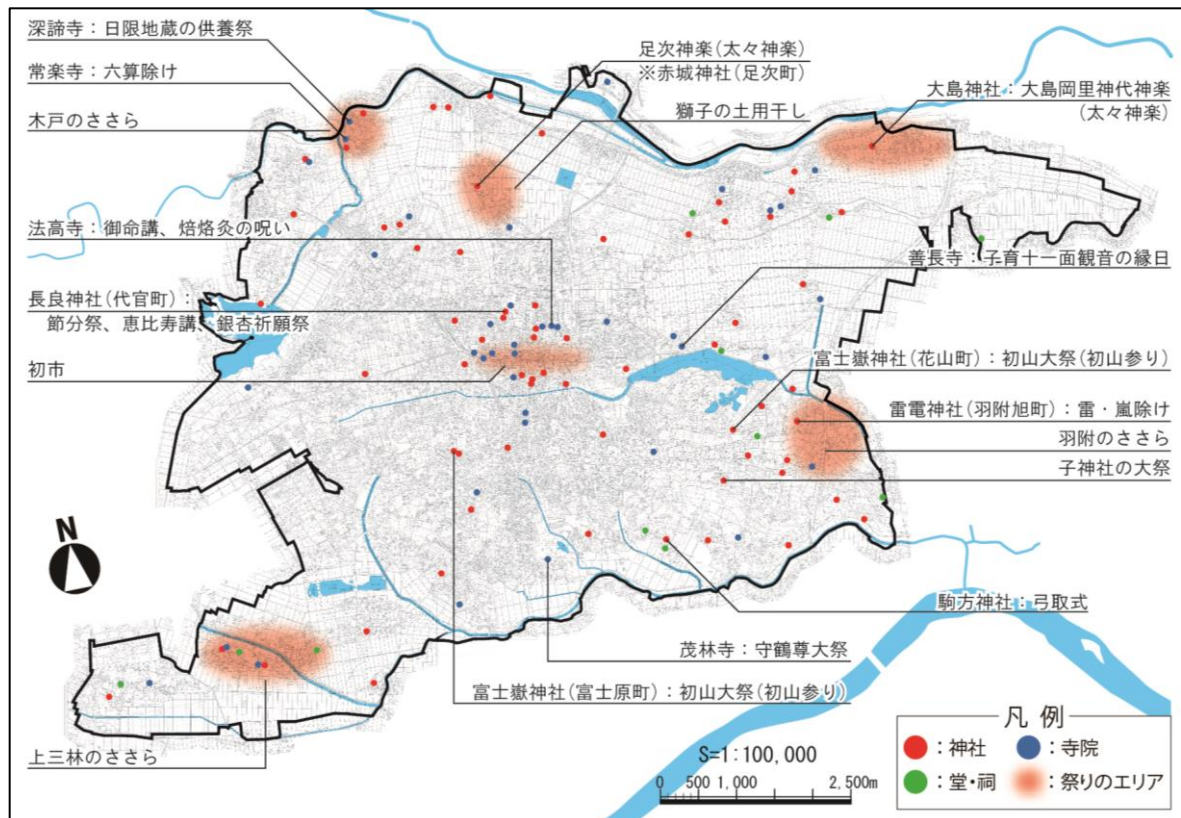


図 2-26 主な社寺と祭りの分布図